

〔翻訳〕

ウッツ・イエグレ
ドイツ語圏における民俗研究の
フィールドワークとその変遷

Utz Jeggle

Zur Geschichte der Feldforschung in der Volkskunde. (1984)

河野 眞(訳・解説)

Japanese translation by KONO Shin

愛知大学非常勤講師

Part-time Lecturer, Aichi University

目次*

統計とエスノグラフィー	164
(統計データの重み)	164
(エスノグラフィーへの立ち返り)	166
実事の眼と旅行家の眼——民俗学の草創期	166
宝探しの眼——ロマン派とグリム兄弟	169
スタンダードの眼——ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール	173
民俗採集の技術——リヒャルト・ヴォシドロ	179
機能主義のフィールドワーク	181
(シュヴィーテリング学派)	182
(マリノフスキー)	186
(マティルデ・ハイン)	188
模索する現代のフィールドワーク	193
(ブレードニヒのサスカチュワン調査)	193
(人間らしさと学術調査のはざままで——ザウアマン)	197
訳注	200
[解説]	208

統計とエスノグラフィー

「民のいとなみとの決別は、従来の民俗研究の方法を見限ることでもあった。情報提供者は偶然の手助けにすぎず、その人物との聞き取りの会話は学術めいた量光でしかないとの批判が起きていた。代わって厳密性と科学性を保證するものとして称揚されたのは統計であった¹⁾。民俗学の資料収集はナイーヴと見られたのだが、以下で検討するように批判は概ね当たっていた。たしかに現代の社会研究の基準を満たすには主観的に過ぎた²⁾。そうした《専門に甘えた局所偏執》³⁾に陥るまいとの強迫観念から、今度は、一般的な社会研究において標準的とされる手続きへの突進に至ったのである。

(統計データの重み)

不正確と低い信頼性への疑義⁴⁾は、必ずしも漠然としたものではない。後ろ向きで問題のない経験形式への不信は、市民的学問とそのコントロールできない秘密を抱えこんだ者に対する不快感に発していたからである。なぜなら、《単独行》であつめた知識を自分だけの判断で価値づけしているからだ。コントロールと会話へのかかる希求について言えば、あの頃の奮闘は無理がなかった。広く見ればヘゲモニー争いの一種でもあろうが、たとえばカイ二乗検定などがこの学問的成功を切り開く棍棒の意味をもったものである。

しかしこの専門分野(民俗学)の方法論の近代化への願いは、(経験型のパラダイムを別にすれば)必ずしも当時の進歩理念の擁護者が言い及ぶほどには事新しいわけではなかった⁵⁾。しかしニッカーポッカーでフィールドに出る伝説収集家は、1960年代になってもなお西ドイツで一般的であった学問のイメージには合わなかった。そうした遅れもあって、当時の大学新設の波のなか、バイエルン州を除けば⁶⁾、フォルクスウンデ(民俗学)が顧慮される余地はなかった。

社会学との接続に焦点がしぼられたのは1968年以後のことであった⁷⁾。テュービンゲン

*原文には区切りは設けられていないが、読みやすさを考慮して目次と小見出しを付けた。

- 1) Horst NEISSER, *Statistik, eine Methode der Volkskunde*. In: Abschied vom Volksleben. Tübingen 1970, S. 105-123.
- 2) Gerhard HEILFURTH, *Über Riehl's Handwerksgeheimnisse des Volksstudiums*. In: Hess.Bl. 60 (1969), S.29-38. S.32.
- 3) 同上, S.11-36.
- 4) Roland NARR, *Volkskunde als Kritische Sozialwissenschaft*. In: Abschied vom Volksleben (前掲注1), S.37-73.
- 5) 経験型社会研究の概説書のなかで、担当したハイルフルトのフォルクスウンデについての概説は混乱をきたしかねず整理もされていないが、そこでもこれにふれられている。次の項目を参照: *Volkskunde* (v.G. HEILFURTH) In: Rene KÖNIG (Hg.), *Handbuch der empirischen Sozialforschung*, Bd.1. Stuttgart 1962, S.537-550.
- 6) バイエルン州では、レーゲンスブルク、バムベルク、そしてアイヒシュテットのカトリック大学にフォルクスウンデの教員ポストが設けられた。
- 7) その頃筆者は、マックス・ウェーバー、ポッパー、アドルノの見解を調和させるという奇妙な試みを行なったが、顧みると我ながら慄然とする。参照、U. JEGGLE, *Die Weltbedingungen der Volkskunde*. In: Abschied vom Volksleben (前掲注1), S.11-36.

大学でも、文化社会学 (Kultursoziologie) が専門分野の名称として最も歓迎されてもよいくらいだった。そして民 (Volk) の語が、それが人を永久にナチス研究と結びつける汚点であるかの如く、とどめを刺さされた (とは言え、今日も社会史では思いがけないルネサンスにぶつかっているが)⁸⁾。この小文が収録される書物をも含む叢書が「民のいとなみ」を掲げるのではなく、冷静な「研究叢書」であるのは、研究所が、専門分野そのものについてと同じく、状況変化を反映するシグナル的なレッテルを探しあてた結果だった。経験型文化研究は(意識されてはいないかも知れないが)社会研究の特定の方向に列なっている。理論的な渴望と共に、内心では統計資料を何とか調達したいと願う種類の研究である。あの頃 ([訳注] 1970年代であろう)、筆者も統計学のコースに通ってⁱⁱⁱ SPSS を習ったものだった。実際、数字が50%以上のスペースを占める民俗学の論文を書いてどこかに載せることを、筆者は永く目標にしていた⁹⁾。

これらの数字は新しい認識願望の表現、すなわち、社会全体の枠組みの中で解明の手立てを得ようとするのは多数者の明らかな諸問題でなければならないことを意味していた。統計が得させる推論の特定の新しい可能性こそ、ばらばらの変数の間の相関について正確な情報をあたえてくれる、ということだった。算数的な厳密さで、主観的解釈の恣意性が、《客観的な世界理解》で置き換えてくれることがもとめられた。《経験型で作業をする研究者は、直接の観察から出発し、システムティックにして、反省的な十全を企図するデータ収集をめざす》のである¹⁰⁾。そしてこれは、新しいものが散らばって混じる独自の^{iv}ピジン語的方法論へと延びていった。その点では、民俗学の伝統は、変化しつつも生き延びた。今日では、民俗学の方法からの最終的な決別を促すことにはならず、またそれをしないからと言って、失われたパラダイスへの帰郷¹¹⁾を説いていることにはならない。むしろ、このピジン語を(比喩的な言い方になるが)言語として受け入れ、育成することが大事であろう。事実それは、より簡便にしてより切実となった。簡便となったのは、社会学への陶醉がおさまったからである。たしかに社会学では、民俗学におけるよりも、より高度な反

8) ルッツ・ニートハマー (Lutz NIETHAMMER [訳注] 1939年にシュトゥットガルトに生まれた現代史家、イェナ大学・ボーフム大学教授を歴任)は、民 (Volk) を《排除された連続性因子》と定義した。参照 In: Die Jahre weiß man nicht..... Berlin 1983, S.8-12. Der Argument Sonderband (AS 103): Kultur zwischen Bürgertum und Volk. Berlin 1983.

9) そうした方向のプログラムのチャンスが筆者にあたえられたことには、クラウス・ロート) Klaus ROTH [訳注] 1939年にハムブルクに生まれた民俗学者、後にミュンヘン大学教授)に感謝する。次の拙論を参照、U. JEGGLE, *Historische Volkskunde und Quantifizierung*. In: ZsFvK, 1980, S.37-57.

10) Helge GERNDT, *Abschied von Riehl - in allen Ehren*. In: Jahrbuch für Volkskunde, 2 (1979), S.77-88, S.80.

11) この小論に因んで筆者は過去の数多くの概説書の序文やハンドブックにかなり苦勞して目を通した。そこから率直に言えば、多くのものが消えてはいず、パラダイスが失われたわけでもない。アードルフ・パツハ (Adolf BACH, *Deutsche Volkskunde*. Heidelberg 1960)、ペスラー (Wilhelm PESSLER [Hg.], *Handbuch der deutschen Volkskunde*. Potsdam o.J. Bd.1, S.16-24)、さらにヴァイス (Richard WEISS, *Volkskunde der Schweiz*. Erlenbach 1946, S.49-53)でも、あまり突っ込んだものではなく、丁寧な言い換え程度である。

省的・抽象的水準で方法論争がなされている。それに較べると、民俗学者が何かに入れあげて読み取りをしているときなど、耳はだらりと垂れている。しかし民俗学者は、それを自分の言葉に移しかえ、しかもほとんど余すところなくそれを行なう。さらに付け加えれば、(残念ながらほんの時折しか提供されないが) 試供品は、宙で形づくられた陳腐という印象を下支えしてくれる¹²⁾。

(エスノグラフィーへの立ち返り)

しかし多面的かつ専門性の高い方法論の必要性が高まったのは事実である。それは、私たちの文化の枠内で、新しい傾向が、平均値を決めるや、個別価値やグループ質問を重要ではないとして気化させてしまう新たな傾向が出てきたからである。特定のマイノリティ(若者や外国人)、個々の価値イメージの差異(エスノグラフィー・モデルや女性研究)から出発する特定の新しい研究命題が示すのは、肝心な問いは数値では表現できないことであり、また私たちの文化の危機も豊かさも(ここでは金銭は限定的でしかないだけになおさら)平均値ではとらえられないことである。エスノグラフィーの次元を取り戻すことが、民俗学の遺産にとってより切実になってきたが、それと言うのも、私たちの文化の不毛化は同時に大河の彼方を流れる新たな泉を潤しているからであり、またそれゆえ支配的な経験型パラダイグマの通常の分割ですませる手続きでは知覚することができないからである。とは言え、能力を比較しようというのではない。もちろん経験型社会研究の方法は、その領域にあっては適切で他のもので代替できないのは言うまでもない。そうではあれ、ひそかな模範として、独自の文化分析方法の発展を妨げるべきではない。もちろん、後者と雖も、まったき独自性ではあり得ず、たしかな機能を果たしている所与のモデルに孜孜として奉仕する。しかしそれは、専門特有の(また特に問題に特有の)働き方をするだろう。なぜなら、単なる愚かな何でも屋の精神である以上に、より多く専門に甘えた偏狭さだからである。

実事の眼と旅行家の眼——民俗学の草創期

いずれにせよ社会学はなお多くの点で模範であるが、その分野でも、近年、たとえばヴォルフガング・ボンズなどが経験(Empirie)の歴史に取り組んでいる¹³⁾。片や民俗学で

12) たとえば次を参照、Fritz SCHÜTZE, *Zur Hervorlockung und Analyse von Erzählungen thematisch relevanter Geschichten im Rahmen soziologischer Feldforschung*. In: Arbeitsgruppe Bielefelder Soziologie (Hg.), *Kommunikative Sozialforschung*. München 1976, S.159-260. Andreas WITZEL, *Verfahren der qualitativen Sozialforschung*. Frankfurt 1982.

13) Wolfgang BONSS, *Die Einübung des Tatsachenblicks. Zur Struktur und Veränderung empirischer Sozialforschung*. Frankfurt 1982. Hermann BERNER, *Die Entstehung der empirischen Sozialforschung*. Giessen 1983.

は、そうした面でのフィールドワークの歴史はなお未整理である¹⁴⁾。それゆえここでは、その欠陥を（欠陥だらけの手つきながらも）埋めてみようと思う。それは、この専門分野から、歴史発展と将来的可能性の面で筆者にとって興味深く思えた里程碑を取り上げることによってである。民俗学という専門分野の名称と特質を啓蒙主義時代のなかに着地させ、内帛学的・統計学的方法と民衆特性の相関への関心に光をあてることに成功したのは、何と言っても^{vi}ヘルムート・メラーの功績であった¹⁵⁾。官庁統計学の推進者としてドイツで《行政的なこの学問形態》¹⁶⁾を共に基礎づけた二人の人物、すなわち^{vii}ヨーハン・ペーター・ズュースミルヒと^{viii}ゴットフリート・アッヘンヴァルを一聯のものとしてメラーは解明した。のみならず、^{ix}フェーリックス・クナップルの手稿に見られるような民俗学の前段階もそこに加わった。たしかに民俗学の物の見方にとっても、《実事性をみがくこと》が鋭敏であるための手立てであろう。

ヘルムート・メラー、^xディーター・ナル、^{xi}ヘルマン・バウジンガーの学問史に関する営為は¹⁷⁾、方法論の歴史から見ると、ロマン主義的な物の見方を脱して、(啓蒙主義のなかで早くも現れた) 社会化動向に立脚した醒めた現実感覚を今日に向けて再発見する試みとして位置づけられよう。民俗学は、特にナチス期に《実事》に向き合う眼を失っただけに、この一聯の歴史への考量はもっともであり、また考慮すべきであろう。しかしすでにメラーが指摘したように、民俗学がかかわる観点は、政治算術と道徳統計学という実事的視点だけではなかった。それと並んで、啓蒙主義の紀行家たちの光学もまた意義をもった¹⁸⁾。旅行家は《事実》を目にするだけではない。その絶えてとどまらぬあり方は、必然的に選択であった。その目にするのはめぼしきものであり、特殊なものであり、ありふれてもいずノーマルでもないものであった。絶えざる移動は旅行者の弱点であったが、また比較する能力はその強みであった。すなわち、実事の視線は、特異なものへの眼によって補われた。^{xii}フリードリヒ・ニコライをはじめとする民俗学的な関心を示した多くの旅行家たちは、ノーマルなものや統計的に確かなものではなく、他とは異なり文化的に独自の輝きを放つ目立った普通でないものに目をとめた。実事の眼は社会研究によって独占の眼へと高められ、《ノーマルな現実》と規定されるものをもその眼でとらえた¹⁹⁾。

14) 1983年夏季のゼミナールで私たちはこれを取り上げた。その時の学生たちの報告にはこの小文に反映させたものもあり、それには感謝をしたい。またクツェンバッハの著作 (Gerhard KUTSCHENBACH, *Feldforschung als subjektiver Prozeß*. Berlin 1982) の他、アンチェ・ヨハンゼン (Antje JOHANNSEN) には民族学文献のエキスパートにしてその刺激に富んだディスカッションに感謝をする。

15) Helmut MÖLLER, *Aus den Anfängen der Volkskunde als Wissenschaft*. In: ZsfV., 1964, S.218–233.

16) BONSS, *Tatsachenblick* (前掲注 13), S.69.

17) Dieter NARR und Hermann BAUSINGER, *Volkskunde 1788*. In: ZsfV., 1964, S.233–241.

18) H. MÖLLER (前掲注 15), S.222f.

19) BONSS, *Tatsachenblick* (前掲注 13), S.104.

社会的環世界・共有世界への優勢な関係に照応するが故にノーマルな現実であるのは、主観的に独立した《事実》として自己を呈示し処理することもできる社会経験の契機……そうした脱主観化経験に対して他の経験内容は《メタフュジーク》あるいは単なる《主観的》としてあらわれる。——この標識によって、すべてのライブ的受容形式が社会典型的に一般化された経験空間から区分される。

旅行家の眼は、旅行家自身の主観的に意識的にとどまって自己制御装置として発展することがないがために、学問的な質にはいたらなかった。その眼は、気分と、その欲する旅行ルートとに従った。ちなみに、傑出した旅行家でもあったゲーテは、『イタリア紀行』の1787年6月にシチリア島からローマへ帰る道中に、ほほえましい（と言ってもよい）こんな述懐をきかせる²⁰⁾。

総じて、各人は他のすべての人間を補完する存在とみなされるべきで、またそう振る舞うとき人間は最も役立ち愛すべきものに見えるとするれば、それは特に紀行文や旅行家にあてはまるはずである。人格・目的・時勢・偶然のできごとの如意と不如意、すべてが人それぞれによって違った現れ方をする。ある旅行家に先行者がいるのを知っていても、私はその旅行家に喜びをおぼえ、それで当面は間に合わせ、彼の後継者を期待するだろう。そしてそのあいだに同じ地方を自分で訪れる幸運がめぐってきた場合には、後継者にも同様に親しみをもって接したい。

旅行家は、通りすがりの者として、自己の勉学の移ろいやすい性格をも直視する機会をもつ。故にその認識は、常に、その前とそれ以後にかかわる歴史性を帯びる。つまるところ、主観は歴史的な限定のなかにある自己を見る。言い換えれば、主観は自己の眼の実事性を信じるのではなく、むしろ眼の相対性と補完必然性を信じている。実事の眼は、自己を、唯一の学問的視覚として構え、物を見る他の一切の形式を学問以前あるいは非学問的と烙印を押すにいたった。検証可能性と正確さの代償に、外観はただ見るだけとして信じず、また学者が信用を得ている掛け替えの無さをその学問テキストが受け入れられているのへの反抗気味に行きわたっている《補完的なもの》を忘却するという犠牲を払う。要するに、私たちは、読むという行為にあたっては、一つの真実にすぎるのではなく、多くの真実を参考にする。この選択行動のなかで、学者にあっては（さもなくば学問的な経験生産のなかではむしろ厳封される）旅行家の眼が保たれてきた。

20) J.W.von GOETHE, *Italienische Reise II*, (dtv Gesamtausgabe, Bd.25). München 1962, S.312. [訳注]『イタリア紀行』が未完であるかどうかともかく、この一文で擱筆される。

宝探しの眼——ロマン派とグリム兄弟

この小文の枠組みでは、そうした出だしは不可避であろう。私たちはいわば通過する存在であり、意識的な一面性のなかで比較的大きなあるいは私たちに重要な思える停留地だけに足を止めるのである。実事の眼と旅行家の眼と並んで、民俗学的な物の見方への第三の眼がかかわってくる。しかしそれは、研究者を（期待に反して）三次元的な見方へ連れて行ってくれるのではなく、むしろ屢々起きたのは一つ目の事態であった。無媒介な経験内容を世界を見るなかへ組み込もうすること、すなわちロマン派の眼である。ノヴァーリスのプログラム《世界のロマン化》は、たしかに事実姿勢への反対運動とみなすことができる。しかしそれはまた学問の出櫃を脅かす観があり、事実 19 世紀を通じて単なる文学かつ非学問性のスタンダード・タイプとして不合格とされた。サイエンスによる世界理解がまだ独占的な地位を要求しない限りでは、^{xiii}トーマス・クーンの言い方を借りればパラダイグマ以前の位相にある間は²¹⁾、すなわち発展がなおオープンで動きのなかにあった時には、このロマン派の経験形式は民俗学の経験には意義があった。

1802 年 6 月、^{xiv}アヒム・フォン・アルニムはクレメンス・ブレンターノと共にしたライン旅行の高揚のなかで、民謡収集『少年の魔法の角笛』を着想した。彼ら二人が共に望んだのは、『民に絶えず親密に接している者にとって……幾世紀と守られきた智慧が一冊の開かれた書巻となる』ことであった²²⁾。この陶醉した世界理解は文学となり、実事とは折り合わなかった。それもあって^{xv}ヨーハン・ハインリヒ・フォスは 1834 年に、『子供と家庭のためのメルヒェン集』を評して、こう苦言を呈した²³⁾。

21) Thomas S. KUHN, *Die Struktur wissenschaftlicher Revolution*. 2.Aufl. Frankfurt 1976 (stw 25), S.33 und 190.

22) Achim von ARNIM, Clemens BRENTANO, *Des Knaben Wunderhorn*. München 1963, dtv-Ausgabe, Bd.3, S.233. 1802 年 6 月のライン河紀行についてはベッティナー・フォン・アルニムがその書簡体小説『クレメンス・ブレンターノの春の花輪』(*Clemens Brentanos Frühlingkranz*) に添付した手紙類を参照、Bettina von ARNIM, *Sämtliche Werke*. Berlin 1920, Bd.1. またこれについては次の文献を参照、Ingeborg DREWITZ, *Bettina von Arnim*. Düsseldorf 1969, S.24f. ベッティナーは自分自身でも非常に興味深いフィールドワークを行ない、またそのいわゆる貧民の本 (*Das Armenbuch*) にこう冠した。《この本は王のためなり》。参照、Bettina von ARNIM, *Das Armenbuch*. Berlin 1921. [訳者補記] ベッティナー・フォン・アルニム (1785-1859) は夫の死とベルリンでのコレラ流行に接して社会活動を始めた 1831 年あたりから社会批判を強め、その方面の代表作『この本は王のためなり』(*Dies Buch gehört dem König*, 1843) を刊行した。またそれに先立って社会の実態調査によって資料収集を行なった。さらに 1842 年には若きカール・マルクスとの面会に応じた (王制の是非で折り合わなかったが)。1847 年には社会批判をとがめられて逮捕され 2 か月間拘留された。

23) *Die Grimmsche Sammlung*. In: Johannes BOLTE, Georg POLIVKA, *Anmerkungen zu den KHM der Brüder GRIMM*, Bd.4., Leipzig 1930, S.450. 藝術家たちによる現実修正は他のロマン派人士をも発奮させた。クレメンス・ブレンターノは、ある手紙のなかでこう述べている。《世界は平板、実に平板だ。それを浮き彫りにする藝術のハンマーがなくてはならない。》C.BRENTANO, *Briefe*. Nürnberg 1951, S.165.

私がここでももどめるのは、語り手の理想である。現にそれは存在しない。であれば、書き手がそれを代弁しなければならない。

ちなみにヴィルヘルム・グリムの遺品のなかに、「怪しいもの・断片・痕跡・個別」と上書きした小包があり、中身はこうであった²⁴⁾。

ハクストハウゼン家から得た一ダース以上の語り物で、それにはヴィルヘルム・グリムが赤ペンで、『無意味・かなり空疎・欠陥多し・歪み・何ものでもない・重複が多すぎる』といった点検を書き添えていた。

書き手は現実をなぞるだけでなく、自分の美観にしたがって調整する。当然ながら、グリム兄弟の収集方法もこの選択眼の影響を受けていた。1810年10月25日付で、ヴィルヘルム・グリムは、ブレンターノに宛てて、マールブルクの語り手の女性との会話にまで進むのに難渋していることを書き送った²⁵⁾。

巫女（[訳注] 語り手を指す比喻）は話したがらなかったのです。彼女が歩き回って語りたりするのを、施設のシスターたちが嫌がるからです。誰か施設管理人の妹を妻に貰って、その夫が妻を通じて、義理の姉を説得して、妻の子供たちにメルヒェンをきかせてやってくれ、また書き取らせてくれ、となるような誰かでも見つける以外には、私の苦勞は水の泡になりかねません。そんなたくさんの坑道や十字軍の末に、ようやく黄金は日の目を見るのです。

ヴィルヘルムは黄金に興味をもったが、確保する道にはなかなか近づけなかった。逆に私たちはそうした採掘方法を知っているため、発見したものが多くの人の手から手へとわたって価値を失なったのではないかと不信に見舞われる。そうした冷淡さにもかかわらず、あるいはそれだからこそ、グリム兄弟は、黄金が地下に隠れていて簡単には掘り出せないことを、めったに記録に残さなかった。なぜなら、ここで、インフォーマントもまた学問世界の光を見てしまうからある。インフォーマントは最初から複数にして一人の女性である。しかし彼女あるいは彼は、自分の宝物を簡単に見せはしない。その場に連れ出される必要がある。そこに収集家がある。ともかくも事を運ぶ収集家がいる。グリム兄弟のインフォーマント、アンナ・フォン・ハクストハウゼンの妹は、1818年にこう記した²⁶⁾。

24) *Die Grimmsche Sammlung* (前掲注 23)、S.442.

25) 同上、S.421.

26) 同上、S.442.

このアンナは本当に幸福な人です。私たちの目の前で何もかも攫ってゆくのですから。彼女の親しみのわく顔立ちのせいかも知れません。彼女がちょっと振り向くと、大勢の人たちが、私たちの誰よりも、彼女に話しかけるのです。

従ってここにあるのは、材料を近づくのを助けるネラティブの要素ではなく、語り手の口をひらかせる親しみのわく顔立ちである。たしかにこの種の観相学的な考察は時代後れになっている。しかし会話を止めてしまう悪い言葉遣いがあるのと同じく、口をつぐませてしまう悪い顔立ちや悪い表情もある。



1. グリム兄弟、ニーダーツヴェーレンでメルヒェンの語り手フィーマン夫人から聞き取り

³⁴⁾L. カッツェンシュタインの原画による木版画 1892年

* [訳者補記] ニーダーツヴェーレン (Niederzwehren) ヘッセン州カッセル市域

それゆえ、よきインフォーマントとは、収集者を民のたましいの深みへ連れ降りてくれる誰かである。それも、流露の元である自らの魂をひらくことによって、あるいは他者を共鳴へと誘う心得によって²⁷⁾。もちろんインフォーマントが平均的な考えを明らかにするという保証はない。これは、後世の議論のなかでは決定的な欠陥として難じられた。しかし、インフォーマントが屹立するのは、他ならぬ特殊な知見によってである。しかも、それはロマン派の書き手によってさらに選定され精選されなければならない。収集に臨んで

27) ノヴァーリスの『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』 ([訳注] 邦訳タイトルは『青い花』) では第5章で、そうした《山の案内人》との出会いが克明に記述される。《その男 (= 外来者) は少年の頃から激しい好奇心をもっていた。山に隠れているに違いないものが何なのか、どこで水流が泉に変わるのか、人が抗いようもなく惹きつけられる金・銀・貴石がどこで見つかるのか、蔵されているか》NOVALIS' *Schriften* Bd.1. Darmstadt 1977, S.239. 《彼 (= 鉱山夫) は、金属の在りかを知って、それを地上に出すだけで満足だった。その輝きも、彼の気高い心を凌駕できなかった》。同上, S.244.; なお鉱山者の姿は『ヴィルヘルム・マイスター』でも重要な役割を果たしている。これについては次の論考を参照, Monika WAGNER, *Der Bergmann inb Wilhelm Meisters Wanderjahren*. In: IASL, 8 (1983), S.145-168.

は屈託なく、文献学的な《忠実さ》への問いなど歯牙にもかけない嘲笑家の一面をもって
いたアルニムは、KHM が出版された後、ヴィルヘルム・グリムに書き送った²⁸⁾。

君は見事な集め方をしたね。ヤーコブに言わなかったことも所々巧妙に押し込んでいる。
しかし、君はもっとたくさんそうすべきだったのだ。

ロマン派の研究者は、収集したものの真正性への義務を感じてははず、感じていたのは収
集物とその素材の隠れた理念であった。その点では、ひたすら事実をみつめるサイエンティ
ストとして選択していたのではなく、珍しいものに食いつく旅行家としてでもなかった。
ロマン派の人々が持っていたのは宝探しの眼であった。目は黄金に釘付けになり、その他
のものは、どこから来たかなどはどちらでもよく、忘れてしまい、同じく何度も洗浄して
狙いの鉱物を取り出せば、残土には何の興味ももたない²⁹⁾。

グリム兄弟の手紙から、私は、レーンハルティン夫人（フランクフルト）のなかに隠れ
ていた秘宝を感じ取りました。これらの子供のメルヒェンを取り出すとは、おお、私
は何と素晴らしい鉱夫・山登りであることか！その幾つかを君に語ることをさせてく
れ。そのなかには、きっと優れたものが二三ありますよ。

隠れたものに狙いをつけ、採掘にあたっては過度に神経質にはならず、さらに予め光るも
の全てが黄金ならずと分かってもいるこうした見方、これが、民俗学の展開にとって宿命
的な結果をもたらした。エピゴーネンたちのロマン主義である。そこでは宝探したちは深
い神話の霧のなかで視界を失い、やがて黄金はみるみる少なくなり、代わって瓦礫が掘り
出された。今日の私たちは、そうした見方とは縁がなくなっている。エスノグラフとし
ては、材料との選択的な付き合いはいただけなくなっており、文献学の訓練を経た原典批
判者の立場からは鉱山採掘を採用せず、また実事の眼をもつ民俗研究者としては理念的な
価値判断をそなえている。宝は坩堝にあつて洗浄と検査で精製しなければならないことも
分かっている。しかしこの種の視覚はやはり意義あるものであり続けている。実事の眼や
旅行家の眼のように表層にとどまるのではなく、深くもぐり、隠れたものを探索するから
である。もっとも、私たちはロマン派人士に較べるとずっと控え目になっており、もはや
黄金を狙ったりはしない。しかし民のたましいは（伝承秩序の沈殿と現今の社会関係から
の要請との間で発達した）心理的構造としてなら昔も今も関心を惹くところがある。メン
タリティー研究は露天掘りではすまず、他からの助けをかりないとすればやはり深い坑道

28) *Die Grimmsche Sammlung* (前掲注 23), S.448.(Brief vom 10.2.15).

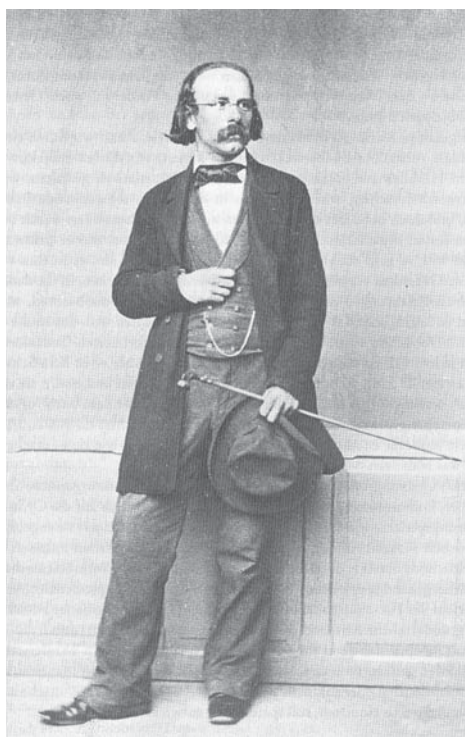
29) *Die Grimmsche Sammlung* (前掲注 23), S.421.

へ入ってゆくしかないが、得られるのは黄金とばかりは限らないのである。

スタンダードの眼——ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール

^{xvii}ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールは、彼を好ましくないと感じる人が多いのはそれとして、フィールドワークの技術をはっきりさせた最初の民俗学者であった。彼の小さな書き物のタイトルがすでに、彼の考えるフィールドと彼の研究との矛盾をはらんだ微妙な緊張を映している。曰く、「手仕事の秘密」³⁰⁾。そこで扱われているのは、学んだり教えたりできるありふれた定番の仕事である。しかしまた、《どんな事実をもより深い関係において把握し、適切な場所に位置づけるために》³¹⁾必要な神秘的な感情移入の能力が入りこんでいる。リールは、絶妙な構成のその考察を終えるにあたり、こう記す。

これが究極にして繊細な職匠の秘密だが、教えることはできない。



リールは、よく引用される^{xviii} スカートとキャミソルの言い回しで実への眼を斥けただけでなく、スタンダードの眼をも繰り広げた。そこには先行形態への視線、したがって実への眼、旅行家の眼、宝探しの眼も実際には入ってくる。これらの諸形態を興味深い結合にまでもっていきっており、そのため今日リールの眼から受け継ぐことができるのは何で、きっぱりはねのけるべきものは何かを検討するのは、やり甲斐のある作業である。

2. ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール 1868年 ミュンヘン

*ハンフシュテンゲル撮影

*[訳者補記] Franz Seraph Hanfstaengl 1804-77 テルツ近郊バイエルンライン (Baiernrain bei Tölz) に生まれ、ミュンヘンに没した画家・石板画家・写真家

晩年の数年間、リールは、集中的に議論する価値のある他の先行者に較べても、ずっと民俗学的な心情を強めていた。しかし、人物について誰もが知るイメージを繰り返すだ

30) Wilhelm Heinrich RIEHL, *Handwerksgeheimnisse des Volksstudiums*. In: Wanderbuch. Stuttgart 1869, S.3-431.

31) 同上, S.31.

けでなく、それを解体することも、その人物が偉人である証しであろう。ちなみに^{xix}ギンター・ヴィーゲルマンは民俗学の概説書のなかで、口いっばいにほおぼった言い方をした³²⁾。

学問営為の尺度に照らせば、リールは、現代の理論に重きをおいた研究の偉大な開拓者と呼んでよい。また経験知識と分析を天才的に結び合わせた人であった。

リールは誰もが倣うことができる理想的な民俗学者だった、とも言う。しかしそれに引き続いて正面からの論議が起きたことは、さして驚くにはあたらない。またそれ自体が、長老リールの、度重なる猛攻にもめげない今日にまで及ぶ神通力をあらわしている。ちなみに^{xx}ハンス・モーザーは、言われるところのパイオニアを、いつもながらの手堅さで解剖した³³⁾。

リールが学問的かつシステムティックな民俗学の開拓者・予告者・定礎者とは、その絶賛されてきた講演における理論からも、現場踏査の実践からも、とうてい言い得ない。

これまで誰も口にしなかったことを、よくぞ言ってくれた、との（ヴィーゲルマンは納得しないだろうが）思いをもつ。旅行家の眼があること、また当然ながら旅行家もまた相関関係を探求することも、その通りである。しかしリール以前には、違反すれすれまで自分の物の見方を明かした人は誰もいなかった。^{xxi}ヘルゲ・ゲルントが示したように、リールを《サイエンスの》学問モデルで図るなら、もちろんリールは落第する。彼は、《反省的かつ完全を期したデータ収集をめざす》ことを目指していなかった³⁴⁾。^{xxii}ゲルハルト・ハイルフルトは《〈経験〉に立脚し、それによって独自の知覚から得られる知見に依拠する行動のあり方、奥に正確さと客観性をもとめて自然科学に接した要請を奥に秘めた研究形態》を挙げるが³⁵⁾、それは無理に詰めこんだところがあり、たぶんそうした聯関にリールは立っていないかった。リールのオリジナルなトーンはこうである³⁶⁾。

特別なまでに埃をかぶった書物世界の涉獵を学ぶことによって、私たちは野外へ踏み

32) Günther WIEGELMANN, Matthias ZENDER und Gerhard HEILFURTH, *Volkskunde. Eine Einführung*. Berlin 1977, S.18.

33) Hans MOSER, *Wilhelm Heinrich Riehl und Volkskunde. Eine wissenschaftsgeschichtliche Korrektur*. In: *Jahrbuch für Volkskunde* 1978, S.9-66, S.56.

34) Helge GERNDT, *Abschied von Riehl* (前掲注 10), S.80.

35) G. HEILFURTH, *Über Riehls Handwerksgeheimnisse des Volksstudiums*. In: *Hess.Bl.* 60 (1969), S.29-38, s.S.31.

36) RIEHL (前掲注 30), S.30.

出す。客観的な成り行きを顧慮しつつであれば、主観的に記述することは許されよう。批判的な検討と併せてなら技巧をこらしてもよいだろう。多彩な揺れ動く生きた日々のなかに飛び込むのだが、私たちの研究を最後に満たしてくれるのは、何よりも、堅固かつ有機的な様相を感得することによってである。

リールは、自分が《究極的には》何を感得したいのかを予め知っていた。彼は輪郭を前以て提示することが屢々であった。指針になる考え方を明示することをリールは重視した。出発の後、個々の経験知識が走ることができるいわば軌道である。

眼にふれるものを観察するのはたやすいが、観察したいものを眼にとめるのは繊細な^{わざ}技である。

リールは自分が何を欲しているかを知っており、どんな場合でも、予め思い描いた思念が彼をその有機的な構造へと導いてゆく。しかし彼は山師ではない。なぜなら彼は、この書き物のなかで自己の認識の仕方を明らかにしているからであり、批判にも供しているからである。これは、その時代の民俗学にとってだけでなく、今日の研究の実際にとってもかなりめずらしい。自己が如何に為すかを明示せず、最新の指針にすがってこれをすべきあれをすべきと喋るだけの現今のメソッド論者よりも、ずっと勇気をもっていた。

しかしリールのスタンダードの眼は、(何が来ようと全てを組み入れる)有機的構造に向いただけでなく、(諸段階が積み上がり、また反復しつつ解釈学的な噛み合いながら新たな可能性を露ささせる)経験の流れの秩序にも向いていた。この方法をも彼は有機的と呼んだが、それは《遅ればせの予備作業は先行するものの試金石としてあらわれるのが常》だからである。かくてリールは、この補完的關係を研究の進展のなかで受け入れるかのよように振る舞い、何もかもを批判にさらすことも厭わない公明正大な研究者として現れる³⁷⁾。

特殊文書をこうして涉獵した後でこそ、もう一度杖を手にとって、全行程を踏破したくなるものだ。なぜなら、どれほど多くものを見過ごしてしまったか、あるいはどれほど多くのものを新たに試すべきかに、ようやく気付くからである。

ここで、リールの研究実践に願望が巣くっていることは、後に改めて取り上げよう。

スタンダードを頭に入れ、旅行の準備をし、歩き、巧みな質問をおこない、日記をつけ、アネクドートをあつめ、本当は禁じられている自分を表に出して、リールは、彼の学

37) 同上、S.15.

問的な経験収穫と加工の全行程を呈示する。彼が農民を愛していなかったのは、^{xxiii}エメリッヒ・フランシスが言うように³⁸⁾、確かなことであろう。そうでなければ、農民を《馬鹿者たち》と呼んだりはしなかったろうし、問いかけの仕方でもあれほど裏をかくような作為を弄さなかったろう³⁹⁾。

農民が私たちに語ることがらは、幸運と偶然の賜物にすぎない。時に多く、時に足らず、時に無価値。しかし農民が話し、感じ、判断する様子を言葉遣いまで追ってみると、屢々、民の最も鋭敏かつ必須の特質が明らかになる。

リールの仕事は行きずりの人のそれであり、予め全てを知った上でのことである。犬を連れ、唇に他人の裏をかく《半ば嘘》⁴⁰⁾を浮かべて、保守的な世界像のための材料を集めたリール、もっとも材料がなくともその世界像はさして違ったものではなかったろうが、そうしたリールの姿は、筆者が最も出逢いたくないものであったろう。研究者リールは、準備によって予め地元民以上に知見をもっていた。少なくともノウハウをもっていた⁴¹⁾。

一番肝心なことを、ひそかにかすめ取ることができるのは、事態の基本をすでに分かっている人だけである。

またこうも言う⁴²⁾。

何が大事で、何がそうでないか、これによって指針を前以て構成した。私は、全民衆体の理想像に視点を定めていた。私の眼には、事実の他には何も調べようとはしない人が看過する幾百の個的な事実が見えている。

フィールドそれ自体には、リールの足を使った研究のなかへ入り込むチャンスはない。なぜなら、リールは《堅固な基本思念に導かれて、思念を探索する》が故に、思念をも見出すからである。《ささいなものから大きなものまで》⁴³⁾が経験として捕捉される。言い換えれば経験的に目の前を通り過ぎる事象は、現実には、中程度の迷彩をほどこした純然たる演繹的事象である。それゆえアネクドートは、いわば解明の一つの種類であるが故に、格

38) Emerich K [laus] FRANCIS, *Ethnos und Demos. Soziologische Beiträge zur Volkstheorie*. Berlin 1965, S.44.

39) RIEHL (前掲注 30), S.11.

40) 同上, S.15.

41) 同上, S.15.

42) 同上, S.23.

43) 同上, S.22.

好の知覚形式である。形体的にはアネクドートは矛盾ではなく、言うなれば、教義的な確証の形式としての語り物である。アネクドートのものと、経験形式としての歩く見聞は、互いに重なり合う。両者ともにイメージに富み、また両者はいずれも、予め明らかであったものを鮮やかに見せてくれる。ちなみに、リールは、その民の調査にあたって鉄道にたよらなかつたことを誇りにしていた⁴⁴⁾。

新しきものを見出し記述せんとする者、須らく徒歩に立脚すべし。

その場合、《テントを開けることができない》と嘆きもするが、また《歩くことそれ自体が居住の一番近い代替でもある》⁴⁵⁾と即座に考えて自らを慰める。これはリールに典型的な思考様式に他ならない。何でも無いものを他のものと関係づけるのである。時には正反対のものを機能的な代替させたりまでして、固定したものなかに動きを、持続の中に移り行きを見定める。行脚の人は、絶えずその居所を移し、万物を過ぎゆく相貌において目にし、何ものにもめり込まず、空間を隅々まで足でさぐり、常に新たな観察をし、指針の思念を変わることなく導いてくれるような指定席をも必要としない。基本的に彼がもつめるのは、ツーリストだけが資源として省察するところのアネクドートである⁴⁶⁾。

実際の研究者にとっては、アネクドートは、他で既にずっと徹底して知っている一般論を記述するための単なる手段にすぎない。

リールがその土地その土地のリアリティーにはラフであり、逆に自分の旅行家のイメージの構築に熱心であったことについては、^{xxiv}レーオポルト・シュミットが^{xxv}ライタ川の一角を例にとって辛辣に皮肉った⁴⁷⁾。

否、リールは、学問的な思想家ではなかつた。そもそも彼が学問としての民俗学の形成における思想家でなかつたことは歴然としている。要するに、陽気な気質にまかせて書きなぐった講演原稿や紀行文を自ら徹頭徹尾ポジティブに受けとめ、情熱的に反響を図ったのだった。

44) STAGL (前掲注 25), S.143, Anm.135.

45) 同上, S.22.

46) 同上, S.22.

47) Leopold SCHMIDT, *Die Entdeckung des Buregenlandes im Biedermeier*. Eisensatdt 1959, S.126. シュミットによれば、リールが記述した旅程路のなかには実際にはまったく見聞していなかつたものも混じっている。《具体的には、この有名な紀行家がパルンドルフ (Parndorf [訳注] 墾ブルゲンラント州北辺の 2018 年現在で人口約 4700 人の町) までは鉄道をつかつた》(S.122)

実際のところ、リールは基本的には^{xxvi}《風俗の型を描く画家》であり⁴⁸⁾、構造を文筆の裏にひそませることによって日常らしさを演出したのである。その偉大な「手仕事の秘密」とは、人の生き方の観を呈するところのもの、その有機的な基本構図の提示ということにある。旅行にしても、見たところは生きた材料を使って事前の思念を鑑^{よろ}うためであった。ただリールはそれを隠さず、またシュミットやモーザーが指摘したようにあまり上手に遣りおせもしなかったため、成果は評価される以上に批判を受けることになった。実際、リールの視線が風俗に固定されていたときには、彼はそれによって民俗学的視線の特殊性を示していた。しかしまたそれは早々にアレンジと編成を経ることになり、決してエスグラフィイー特有の世界にとどまらなかった。しかもリールは、認識のどの段階でも研究主体が中心になることを果敢に明示した。それは、準備段階(仮説形成)でも、材料収集でも、展開でも、さらに最後の記述でもそうであった。

リールの《学問的方法論に反するナイーブさ》を咎めたのはゲルントだった⁴⁹⁾。実際、リールは、(その当時の)支配的なパラダイムにしがみつかなかった。むしろ、こうなるだろう⁵⁰⁾。

統計では、社会的現実が、さまざま状況のなかで見いだされ比較できる計測可能な《メルクマール》という個々の独立した変数に解体される限りで《経験型》として受け入れられる。それに対して、モノグラフィイー(個別研究)の視線はそうした《メルクマール》に関係するのではなく、生きた世界で伝承される実存にかかわってゆく。その実存が《現実の》ものとして知覚され、また行為主体自身によって体験される。モノグラフィイーにおける再構成では、統計におけるのとは異なるという以上のものが大事になる。なぜなら、主体に依存するのではない平均的特性の集積ではすまず、質的な(その連関が主体と状況とからみあって土台をつくっている)特殊性の《総体》を問うからである。

かかる視線を、我らがリールは持ち合わせていた。とは言え、彼は経験型の探求者ではなく、基本は黄金を掘る人の後進であった。しかしまた彼の宝はすでに予め彼の頭の中に準備されていて、それを文化空間にうめこみ、さらにアネクドートとして再び集めたのだった。リールは現実を過小に見ており、彼の世界像が現実によって動揺させられることはなかった。もちろん、どんなエスノグラフも、頭のなかにある像をなぞるという以外には世界を描けない。それは、どんな方法的な補助手段を活用するか、それを使わないか、とは別のことからである。リールが世界を主観的に見ていること自体は非難できない。が、

48) フォン・ベーム (von BOEHM) はリールをこう分類した。ハイルフルトより重引、(前掲注 35) S.35.

49) GERNDT (前掲注 34), S.80.

50) BONSS, *Tatsachenblick* (前掲注 13), S.110f.

いずれにせよリールは、規準とリアリティーを混同しており、スタンダードを世界そのものと見なしたのである。

民俗採集の技術——リヒアルト・ヴォシドロ

頑ななスタンダード方法論のリールと違って、むしろ対極にあるのが、^{xviii}リヒアルト・ヴォシドロである。《魔術師》⁵¹⁾リール、それは言葉で魔法をかけることができたからだが、こういう言い方に気分を害するのは、解毒魔法の心得を持たない読者だけであろう。それに較べると、ヴォシドロはそこまで縛りあげはせず、無理強いもせずに記述した。その代わり《土俗的伝承を収集する技術》を駆使して、生きて目の当たりにするような記述ができた⁵²⁾。そしてやはり自分なりのコツをもっていた。《どんな身分の人々とも交流ができる幸せな気質、そして事物へのとらわれない愛着》である。しかしリールに較べると、ずっとあっさりして、《巨匠的》な雰囲気も濃厚ではなかった。ヴォシドロは、経験にただちに嚮鎖をはめるが如き《指針思念》を持たなかった。彼はむしろ好奇心にあふれた収集家で、認識を方向付ける種類の関心とは別のところで処理することができた。《礎石を据える競いに疲れることがなければ、いつの日か、巨匠が出現して、民衆体の誇り高き記念碑を打ち立てることもできよう》⁵³⁾——これは上記の論説の締め括りだが、筆が滑ったきらいがあり、必ずしも事実ではなかった。

ヴォシドロにとっては、アネクドートは理解のための鍵ではなかった。徒歩とアネクドートの経験が親近という筆者のテーゼの裏づけにもなるが、ヴォシドロは、旅の道のりよりも、むしろ土地そのものに強い関心を示した。探訪した先々で永く過ごすことに執着した。彼が収集したのは《地元》においてだけである。そこでは彼は、誘導尋問を事とする旅人ではなく、《社会の夕べを開くヴォスロフさん》（これは、ヴォシドロのイニシアティヴで曜日が決まった「土曜の会」にあつまるインフォーマントの一人が呼んだ言い方）であった。しかしリールの活動との最大の違いは、人々に対する姿勢・相互交流の能力・観察と記録の意味にある。リールのテクニクは、材料を聞き出すことにあった。そして解説のなかに、突然、農民は馬鹿だとのコメントが入ってきたりする。すでに見たように、

51) ゲルト (前掲注 34) は考察を次のように締めくくっている。《それは、民俗学が、言葉の魔術への呪縛から解放され、現代の学問的基準に照応する明晰かつ論議的な思考へと延びていったことによってであった》(S.88); リールは文章によって人を惑わしたとの非難が絶えず投げかけられてきた。それを見ると、現代の研究者は言葉を操ってはいないかのようなのであるが、実際には別のコードをもちいている。テキストは、それが写す現実と合致しているのではなく、現実を表現するだけであり、そして多少とも現実と重なっている。それゆえ文章の美は、頭から正確さと矛盾しはせず、現実を明快と克明化のなかに置きなおすのである。

52) Richard WOSSIDLO, *Über die Technik des Sammelns volkstümlicher Überlieferungen*. In: ZsfVk 16 (1906), S.1-24.

53) 同上, S.24.

関心は農民が話していることにはではなく、研究者の聴取それ自体に向いていた。それに対してヴォシドロの場合は、相手に気持ちを注いでいることが伝わってくる。それが、情熱的なエスノグラフと有識者との隔たりであった。

ヴォシドロは、自分とフィールドとの間で起きたことがらを多くの局面で書きとめた。飲食旅館でもめ事になったこともそうで、トランプをしている人たちの話に聞き耳を立ててメモをとったためであった⁵⁴⁾。

あんさんよ、俺たちがここで話しているのを調書にとる権利がどこにあるんだ。居酒屋は法廷じゃねえぞ！

《オリジナルなもの》をつかむにはどれほどの困難があることか。とりわけ、《外来者の頭の間尺に合う》には、あまりにも独自のものである場合は。またヴォシドロは骨董屋と見られたこともあった。(案内人の)フリッツ坊やを酒場で守ってやらないといけないのだが、坊やは危ないとみると、ただちに退散する始末だった……。ヴォシドロはバツのわるそうに《フリッツは駄賃を遠慮しない》とも綴っている。さらに粗暴な場面になったこともあった。フィールドワーカーが強いられる厄介な事態の数々、一度はサーカス団の一員と間違えられたことすらあった。《よかったら、今夜、コメディを一幕やってくれない》。あるいは、きわどい謎々を集めていたときには、一人の女性が鋭く切り込んできた。《あなたはえらく犯罪者の肩をもつね。監獄から出してもらった話をきかせてくれるかね》。また婚礼の幹旋者とまちがえられたこともあった。《その焼肉が要るところをみるとね、だけどあれは婚礼のときしか焼かないよ》。ちょうど^{xxviii}ウッツ・マースが語るインド人の話、つまりそのシチュエーションに特有の言語姿勢を特徴づけるために引き合いに出す話と同工である⁵⁵⁾。

ヴォシドロの語り口には多分に感情移入がみとめられはするが、解釈はきわめて少ない。彼は、自分のできごとを脚注に落とし、方言でも記している。方言というこの豊かな

54) 同上、S.24. 引用はすべて上記の論説（前掲注 52）による。

55) Utz MAAS, *Kann man Sprache lehren?* Frankfurt 1976. 《そうした経験がどう見えるのか、アメリカ・インディアンを記述するために出かけたロエーヴェン (LOEWEN) という名前の言語学者がこんなことを話してくれた。(遂にそのインフォーマントがやってきた。私たちは作業にとりかかった。「俺は走る、は君たちの言葉ではどうなのかね?」インディアンはしばらく黙っていた。地面を見ていたが、やがて外へ出て行った。突然、彼の顔が輝き、何かひらめいたようだった。そして非常に早口で喋った。それを即座に書き写せる状態にあったなら、何頁をもうずめていたはずだが) ……その研究者は元の質問へ返った。「今言った全部が“走る”という意味なのかね、と問うた。インディアンは否定した。「これは貴方と一緒にここで坐っているという意味でして、まあ何ですか、あたしが戸の方を見て、そこに獣でも見えりゃ、即座に槍をつかんで、すぐさまそいつを走って追いかけますぜ」。そして思案の体でこう付け加えた。「何も無いのに走るのは馬鹿だけですよ!」》(S.26.)

経験財からは、あれこれの収集旅行などからよりもずっと多くのことが伝わってくる。詰まるところヴォシドロは、指南を事とするあらゆる人々が決まって言うのと同じような考え方をしていることにもなる。真実は実例のなかに隠れている、と。言い換えれば、理論でよいならリールがいるだろう。そうすると二人の才能が合体しておればと願われる。つまり、指針になる思想と筋の通った好奇心の適切な混合、同じくスタンダードの理論と対人的的当意即妙の融合、批判眼に裏打ちされた疑い深さと心のこもった信じやすさの合体で、そうなれば《そうした交流にさいしての錯覚は完全に排除される》⁵⁶⁾。ヴォシドロは、巨匠たるを欲せず、人夫や人夫頭を自認していたが、含意は、時間をとられ材料に押しつぶされてもお疲れを知らないことにあった。リールの目標は《いずれの事実をもより深い聯関において捉え適切に位置づける》ことだったか⁵⁷⁾。ヴォシドロは収集家の幸福に満足していた⁵⁸⁾。

狭き地域なりとも、宿願棄つることなくんば大なる収獲得るも可なり。ドイツのふるさとへの愛着は、すでに多数を犠牲に供したるも、なお労苦を厭わぬ力を授けてくれる。我が行く手に幸あれかし！

これは後年の報告文の締めくくりである。そこでのヴォシドロは、実証的なあらゆる努力はそれとして、突きつめると、古き宝掘りの眼を想起させる。ヴォシドロの収集もまた深みを探る体であった。その明かすところでは、^{xxx}ギーロフ（[訳注] メクレンブルクの村）の老いた煉瓦工と顔を合わせておれば、すでにそれだけで勇気づけられることも屢々で、《あだかも幾世紀を遡りてゲルマンの司祭の声聴く心地すら》⁵⁹⁾覚えるのであった。

機能主義のフィールドワーク

機能主義(Funktionalismus)は、スタンダードの眼と収集の眼を橋渡しする可能性をもった。ヘルムート・メラーはマリノフスキーが、《アームチェア・スコラー》（[訳注] 書齋の学者の意でフレイザーなどへの批判的なレッテル）や収集ツーリストを難じていたことに範を見て、研究の実際の発展を、すなわち理論的準備と経験型調査とがバランスをとって併存することを望見する⁶⁰⁾。この種のコンセプトをドイツ民俗学に取り入れていたのが^{xxx}シュヴィーテ

56) WOSSIDLO (前掲注 52), S.21.

57) RIEHL (前掲注 30), S.31.

58) Richard WOSSIDLO, *Über das Sammeln von Volksüberlieferungen*. In: Deutsche Forschung, H.6, Deutsche Volkskunde. Berlin 1928, S.142-150.

59) WOSSIDLO (前掲注 52), S.31.

60) Helmut MÖLLER, *Untersuchungen zum Funktionalismus*. Göttingen 1954.

リング学派で、エスノロジーにおけると同じく、フィールドワークが決定的な意味をもった。

(シュヴィーテリング学派)

フランクフルト学派〔訳注〕シュヴィーテリング学派と同意)の優れた研究者たちは、真剣にこれに取り組んだ。この研究分野において、ただの収集を上回る作業、すなわち(一見では確かな先行形態ながらその実)ただの経験的確認でしかなかった観察を超える把握が重視されたのは、これが最初であった。

とは言え、今日の視点や用語からは、たとえば^{xxxi}マルタ・ブリングマイヤーが^{xxxii}ペスラーの民俗学概説書において提示した方法論は読む者を凍りつかせる⁶¹⁾。

民俗学ならびに有機的統一としての民の観念にかかわる社会学の方法は、W.H. リーの民の社会学の発展となる。この統一をその本質的核心において把握するために、民衆体の実存を秘し・^{xxxiii}《母なる大地(培養土)》をつくり・民の総体に存在と特質をあたえている層に視線は向けられる。

言葉は時代の様相に左右されることを自己の過失から告白するとしても、またこの概説書の刊行が1933年以後であるとしても、経験と理論のあり得べきバランスは最初から壊れている。有機的な統一(機能主義の枠組みとしては奇妙なすり替えになってしまう)には存在核があり、それは^{xxxiv}農民存在(現実には終焉の度合いがたかまっていた)のなかに見出されると言う。

ドイツでの民俗学の機能主義は、フィールドに自分たちなりのダイナミズムを付与することに難渋した。^{xxxv}プロニスワフ・マリノフスキーと特に^{xxxvi}エドワード・E・エヴァンズ=プリチャードの教説を引き合いにするなら、エスノローグが依拠するのは自分が目前にするものであるが、また《自分が探しているのとは屢々異なったものを見出す》⁶²⁾ ことにもなる。そうではあれ、エヴァンズ=プリチャードなら、^{xxxvii}リーゼンベック〔訳注〕ブリングマイヤーの出身地で調査フィールド)でも民謡の探索はしなかったろう。他方、マルタ・ブリングマイヤーも、もはや存在しない《理念型》を追っているわけではない⁶³⁾。

61) Wilhelm PESSLER, *Handbuch der Deutschen Volkskunde*. Potsdam o.J., S.20.

62) E.E. EVANS-PRITCHARD, *Social Anthropology*. Oxford 1951, S.64. エヴァンズ=プリチャードはアフリカでの経験を次のように記している。《ザンデランド(Zandeland〔訳注〕ナイル川中流域からコンゴ川上流にかけての乾燥地帯で大半は南スーダン領)を歩いたとき、関心は魔女にはなく、アザンデ族だった。そのため彼らに案内してもらおうしかなかった。またヌエルランド(Nuerland〔訳注〕ナイル川支流のバルハル・アルガザル川とソバト川流域)でも関心は牛にはなく、ヌエル族だった。その結果、否応なく牛に取り組んだ。》EVANS-PRITCHARD, *Hexrei, Orakel und Magie bei Zande*. Frankfurt 1978, S.239.

63) Martha BRINGEMEIER, *Gemeinschaft und Volkslied. Ein Beitrag zur Dorfkultur des Münsterlands*. Münster 1931.

それに今日では、我々が村々ではゲマインシャフト（共同体）は著しく壊れている。民俗衣装は消え、民謡は僅かな小グループだけのものになってしまっている。

この困難を彼女はどうか克服しただろうか。彼女が見出したのは、普通ではない能力のインフォーマントであった。彼女が敬意を以て接した80歳の^{xxxviii}フェアラゲ夫人は強い印象をあたえる人であった（尊敬を得るだけでなく、研究者にとっては特別な人生歴を感じさせる打ってつけのインフォーマントが屢々いるように思われる）。しかしブリンゲマイヤーがインフォーマントと共につくり上げたのは、黄昏の村の姿であった。すなわち、ふるさと詩人が待望するところのもの、それを、リールとゲマインシャフト観念に依拠するこの女性民俗研究者のモチベーションとなったのだ⁶⁵）。当然にも、『民俗学は現代学でなければならない』は願望文にとどまった⁶⁶）。

この願望文を民俗学に特有のかたちで実際のものとしたのは^{xxxix}マティルデ・ハインであった。ハインによる^{xl}マールドルフ村と^{xli}ウルファ村の二つの研究成果は、たしかに我々がツンフトの模範例⁶⁷）（[訳注] ツンフトは業界団体すなわち民俗学界の比喩）である。ハインにとって大事なものは、生き方の全体⁶⁸）、言い換えればエヴァンズ＝プリチャードの説く総合性であった⁶⁹）。

人々の社会生活のあらゆる部分を、彼らの社会生活そのものの全コンテキストはともかく、全体として現れるところを、明快かつ整合的に理解することは可能である。

ハインはマールドルフ村では民俗衣装に、ウルファ村では諺に焦点を当てたが、その研究の測鉛は、村の全体像へのパースペクティヴを提示し得るものであった。もっとも、ハインが彼女自身の手仕事の秘密を明かしてくれなかったのは残念である。実際、彼女が研究

64) 以下のブレードニヒとザウアマンに関する記述を参照。なおアルベルト・イーリエン（[訳注] Albert ILIEN 1944-2011 テュービンゲン大学に学び、イエグレの村落研究の共同者、その後ハノーファー大学の教育学の教授）と筆者もキーピング村の調査にさいして、マルタ・ブリンゲマイヤーがフェアラゲ夫人に感謝をしたのと同じように、感謝すべき一家族を見出した。

65) BRINGEMEIER（前掲注 52）, S.6.

66) 同上、S.3.

67) Mathilde HAIN, *Das Lebensbild eines oberhessischen Trachtendorfes*. Jena 1936.; DIES., *Sprichwort und Volkssprache. Eine volkskundlich-soziologische Dorfuntersuchung*. Gießen 1951. ヘルマン・パウジンガーは、フライブルクの研究発表会での指針のコメントのなかでマティルデ・ハインのフィールドワーカーとしての意義について《この学問分野に重要な道筋を示した民俗研究者の一人……》として言及した。参照、In: Rolf W. BREDNICH u.a., *Lebenslauf und Lebenszusammenhang. Vorträge der Arbeitstagung der DGV in Freiburg* (16.-18.3.1981). Freiburg 1982, S.5.

68) HAIN, *Trachtendorf*（前掲注 67）, S.8.

69) EVANS-PRITCHARD, *Social Anthropology*. Oxford 1951, S.80.

における主体としてめったに表に出ないのは、却って注目されよう。諺など言語面の著作では、少なくとも、多くのシチュエーションが活写され、それゆえ彼女は活発な聴き手としてそこにいたはずだが、自分自身をめったに描いていない⁷⁰⁾。観察を始めたのは、1938年の秋であった⁷¹⁾。

私は、ウルファの小農の家族共同体のなかへ入った。そこから私は、一年にわたって村のほとんどの家族ならびに若者たちのさまざまなグループと知り合いになった。そして村の住民と労働を共にし、習俗でもある祭りの日を楽しみ、プロテスタント信徒の信心の静謐の時を過ごし、さらに戦争第一年目の困窮を経験した。

たしかに《非常に高度な》参与である。招じ入れられた女性研究者は共同体に入り込んだ後は霞か雲のようであり、その分だけ現実性を欠いている。テキストから受ける印象では、村へ入るにあたって摩擦も問題もなかったかのようである。調査主体は溶解しており、その読者への訴え方は独特である。と言うのは、研究者のポジションがどこにも反映されていず、そのためウルファ村ではすべてが通常通りで、かなり長期にわたって誰かが村の言葉にだけ関心を寄せていたらしいとの感想しか起こさせないからである。それは、たとえばマリノフスキーが語る遠隔地の諸文化における経験⁷²⁾とはまるで違ったものだった。

私のフィールドワークが私の理念や関心、それどころか私の先入観でも影響を受けることは避けられない。率直かつ公正な道を歩む者はそれをはっきり口にし、そのため容易に見抜かれ、場合によっては反駁されたり排撃されたりすることもある。別の道を歩む者は、それを可能な限りたくみに隠す。

マティルデ・ハインが率直かつ公正な道をとらなかったとなじるわけではない。が、共同体のなかへ文句も言わずに入り込んだ能力は、そこで感じた幸福や怒りや孤立無援や安堵の感情を表現することができない能力不足とも重なってくる。エスノログなら、そうした場所でも心を打つような学習をするはずである⁷³⁾。

70) 筆者はハインのこの書物を精読ではなく、頁を漫然とめくっているうちに、一か所だけだが、著者がインフォーマントとの会話者として現れる箇所があることに気づいた。参照、HAIN, *Sprichwort* (前掲注67)、S.68.

71) 同上、S.11.

72) Bronisław MALINOWSKI, *Das Geschlechtsleben der Wilden in Northwest-Melanesien* ([訳注]『北西メラネシアの未開人の性生活』原書1929年のドイツ語訳)、S.312.

73) Petti J. PELTO, *Anthropological Research. The Structure of Inquiry*. New York 1970, p.222.

エスノグラファーが、昆虫ではなく人間を研究し始めたとき以来、彼のフィールドワークは彼の中に情感を呼び起こしてきた。私個人について言えば、大きな心理的ストレスの下で暮らし……《カントリー・ライフ》と言われるような田舎らしい平穏をほとんど感じなかった。たぶんこれは、フィールドワークには不可避なことなのだ。

^{xiii}ロザリー・ウォックスは過食に陥り⁷⁴⁾、日本で調査をした3か月間に体重が30ポンド増えたと記している。ウォックスはまた同僚の一人が完全に強制償還状態になって一日中『リーダーズダイジェスト』とピーナツバター漬けになってしまったことも伝えている。^{xiiii}ジャン・ブリッグズもエスキモーの間にいたとき、毎夜テントに引きこもり、《パンノック ([訳注] イギリスのパン菓子)》を食べ、それにやはりピーナツバターで心理的平衡を保った⁷⁵⁾。

ウルファ村では心理的ストレスがなかったとも見えるが、シュヴィーテリング学派の人々の方法論的な土台が然らしめるところ共同体のなかでの埋没は、(それがあってはじめて研究が可能になる) 対象への距離を失う観がある故に矛盾をきたしてもいる⁷⁶⁾。ブリンゲマイヤーの姿勢はこうである⁷⁷⁾。

民の物象と共同体のそうした融合は、内的な運動を長期にわたってつかむ観察を前提とし、それが得られるのは、諸集団との全き親近によってのみである。彼らの世界を共に生きることができるのでなければならない。さもなくば、人々への質問も彼らの生き方への観察も外面的にとどまってしまう。

しかし、この世界を再構成し理解しようとするのは自己の経験にもとづくのであり、正にそれゆえに、そこで共振する自己の波動を、自分自身にも読者に隠さないことが不可欠の

74) ロザリー・ウォックス女史の大食の経験は次の箇所を参照、In: PELTO (前掲注 73), p.224. また《あるフィールドワーカー》のこととして紹介される《リーダーズダイジェスト》と《ピーナツバターのサンドウィッチ》についても同箇所を参照。

75) ブリッグズ女史はエスキモーのもとの調査研究についてこう記している。《テントは、私が何でも持ち込める避難場所となった。……そこで、パンノックとピーナツ・バターで破壊された心を修理した》。パンノック (bannock) とは平たい菓子パン (独 Fladenbrot) を言う。類例については次を参照、D.G. JONMANS / P. GUTKIND, *Anthropologists in the Field*. New York 1967. これに関する総体的な問題圏についてロルフ・リントナーの論考が指標的である。Rolf LINDNER, *Die Angst des Forschers vor demFeld*. In: ZsfVvk, 1981, S.51-66.

76) そうした距離は今日では否定されることも少なくない。それは対象 (Objekt 客体) を主体 (Subjekt) に置き換えることによって、すなわち両者を同等に置くことによってである。しかし自己理解と他者理解の問題は民俗学ではなお徹底した問題とされたことがなく、まして解決されてはいない。これについては次の文献を参照、Peter WINCH, *Was heißt eine primitive Gesellschaft verstehen ?* In: H.G. KRIPPENBERG u.a.(Hg.), *Magie*. Frankfurt 1978, S.73-118.

77) BRINGEMEIER in PESSLER (前掲注 61), S.23.

はずである。

(マリノフスキー)

マリノフスキーの調査研究は、今日から見ると、多くの点においてコロニアリズムと映るが、マリノフスキー自身は自己を常に明示していた⁷⁸⁾。実際、一人の人間が自己の単純ではない内面とどれほど毅然と向き合っていることか、彼がどれほど率直に自己の弱さを自ら明らかにしていることか、どれほど孤独に悩み、状況全体にどれほど苦しんでいることか、これらが救いとアドヴァイスをふんだんに与えてくれる。対象設定の方法がそれはそれで装置に習熟することがもとめられるのと同じく、主観を基準とするフィールドワークの場合も、研究者の視点についてプライベートかつ親密さによるとも見えるまでの知見を能う限り多く得ることが必要になる。マリノフスキーの場合も、ホームシックに襲われ、屢々頭痛に悩み、時には《黒々とした絶望》をも経験したこと、また夢にひたつたことをも記している。《奇妙な自己発情的な感覚、自分の唇にキスをしたくなるような思い……》(p. 13)。また「トリストアンとイゾルデ」のライトモチーフが頭に浮かび (p. 52)、美しい風景のなかでそれに相応すると言うべきか、風景美をそれらしく (また愉快に) 解釈してもいいような気持ちなる、とも記す。《女性の美を改めて発見している、あるいはそれを追っている!》(p. 83)。性的な人種的な願望に一再ならず身をゆだねることにも、彼は臆さない。《かわいいほっそりした美しい少女が目の前を歩いていた。その背中筋の筋肉や、体つきや、脚や、そしてボディの美、私たち白人に隠されていたそれらが私を魅了してやまなかった。おそらく自分の妻でも、背後から肉の揺らぎをそんなに永く見つめる機会は、この小さな動物の場合ほどにはないだろう。そうした時、自分が蛮人ではなく、このかわいい少女を所有できないことが残念だった》(p. 255)。このあけすけな告白は啞然とさせるほどである。しかし基準の提示でもある。もちろん研究者の誰もが日記を公表しなければならぬわけではない。しかし誰もが、自分の無恥な願望・夢想・情念をマリノフスキーと同じ妥協無く分析する必要がある。マリノフスキーがシンパシーを得るには程遠い側面を直視したことが、逆にシンパシーを呼び起こす。

トロブリアンド島での写真もそうである。ここでは2枚を取り挙げたい。最初の写真(写真3)では、白人はブリッジ・ズボンにゲートルを巻き、それに付きもののトロピカル帽をかぶって、画面のほぼ中央に立っている。そして二人の少女の晴れ着を手で調べている。女性の付けている首飾りを彼は物めずらしそうに見つめ、指で調べ、片や少女は当惑したように視線をそらしている。とてもカメラを正面から見るができないらしい。そして

78) ここではマリノフスキーの太平洋研究の諸書を挙げる。参照、B. MALINOWSKI, *Schriften in vier Bänden*, Bd.1-3. Hg.von Fritz KRAMER. Frankfurt 1981. MALINOWSKI, *A Diary in the strict Sense of the Term*. New York 1967. この箇所の長文の原注を本文へ移す。(p.13)等はここで挙げられるマリノフスキーの日記の頁。

なすがままにされている。少女の脚は固くとじられ、それに対してエスノグラーフの方は膝を気楽にあそばせている。あきらかにエスノグラーフがその場の主人であり、リラックスしてさえいる。隣りに立つもう一人の少女も、その姿勢は卒倒する寸前のようにも見える。背後の木陰に坐っている男たちが何を考えているのかは定かには分かりかねるが、一人はエスノグラーフのしぐさにコメントを加えているのかも知れない。子供たちは、カメラを見つめているように思われる。左端の男は、遠方に目を走らせ、両腕をさすっている。その表情は腹立たしげとも見受けられる。内心に怒りがこみあげ、その爆発をおさえているかのようなのである。それはシチュエーションを変えてみればよく分かる。例えばだが、日本のエスノグラーフがキモノ姿で筆者のところへ来て、私の妻に婚礼衣装を着けることをもとめ、私の目の前で妻のネックレスをいじったりしたとすれば、そいつを追いだすだろう。



3. プロニスワフ・マリノフスキー

出典：『メラネシア北西域における未開人の性生活』原書 1929 年

4. プロニスワフ・マリノフスキー

出典：『メラネシア北西域における未開人の性生活』原書 1929 年



二枚目の写真（写真4）⁷⁹⁾では、エスノグラーフは一転してリラックスどころではなくなっている。サファリのハンターさながら丸太の上に立ち、しかも傲然と片脚を前へ突き出している。両手を腰に当てているしぐさは、まるで仮想のコルト拳銃を抜こうしているかのようなのである。トロピカル・ハットすら被らず、頭を相手に突き出している。その相手の方は、椰子

の木によりかかって脚を遊ばせ、眼は遠くを見ている。しかしエスノグラーフの突き入るような視線を気にする風ではなく、自己の世界に自信をもっており、そこでは闖入者は見た目にすらカウンターパートではない。この地元民は陶然と遠くをみつめ、白人の傍若無

79) この写真についてはリントナーの図版33を参照

人にも、その場の主である者の自信たしかな姿勢で対峙している。彼はヤシの木と共にあって、またそれによって生き、その世界の平穩に依拠することを知っている。自分が主人であることを示すのに、軍靴をつける必要を覚えないのである。

これらの写真に写ったエスノロークがシンパシーをあたえるようなものではないと考えると、マリノフスキーが気の向くままに小屋を覗き込んだり、タバコをプレゼントにする代わりに家中へ踏み込んだ⁸⁰⁾傍若無人ぶりが目に浮かぶ。しかし、彼は、自分が平和の攪乱者・不愉快な闖入者であるその存在のあり方を隠して、批判にも供している。他者がルーベで仔細に調べることもできる検体ですらある。

(マティルデ・ハイン)

ところで、これと比較して、マティルデ・ハインのマールドルフ村での衣装調査に付けられた写真を見ると、気づくことがある。それは一回きりではなく、また偶然でもない。マールドルフ村でも、マティルデ・ハインが目標としたのは、《生き方全体の直接的な把握》であった⁸¹⁾。すなわち《民俗的な共同体にとっての衣装の意味と意義への本質的な問い》⁸²⁾に重点がおかれた。それゆえ、特に民俗研究ではめずらしい位にまで高密度にそこに存在したにもかかわらず、その研究者の姿は見えない。共同体の邪魔にならないようにと、その一部となり隠れ蓑で姿を隠す。子供たちは、目をつぶったとき、誰も見えないと思ひこむのを重ねてもよい。ここで注目するのは写真であるが、写真が研究の凝縮した構成部分であり、研究計画に密接にかかわっていることについて、ハイン自身がこう述べている⁸³⁾。

画家や写真家は、美的な要請に従うのと同じくらいに、生き方全体の思想を映像のなかで表そうとする。農民の年間推移のなかで衣装が着替えられてゆく様子の（わざとではない）写真は、本を彩る偶然のイラストや装飾と見られてはならない。研究がかわる諸問題から発するもので、研究目的を直接支えている。

筆者はこの説明を真剣に受けとめ、また研究者が見えないことに検討を加えようと思う。それにあたっては、《ただのドキュメント》の性格とされる写真が勘違いされがちなことに鑑み、チュービンゲンの美術研究者^{xiv}モニカ・ヴァーグナーと共同で、写真に隠れて

80) B. MALINOWSKI, *Argonauts of the Western Pacific*. London (8. Aufl.) 1972, p.8. 《事実、私が何事にも嗅覚をもって、マナーをわきまえたネイティブの人々が何か無理強いなど考えていない場合ですら何かを感じつつ知っていることを知るや、彼らは、私を彼らの生活一部分ないしは部分、つまり必要悪ないしは致し方ない厄介者とみなすことをやめた。タバコを贈ったことで和んだのだ。》

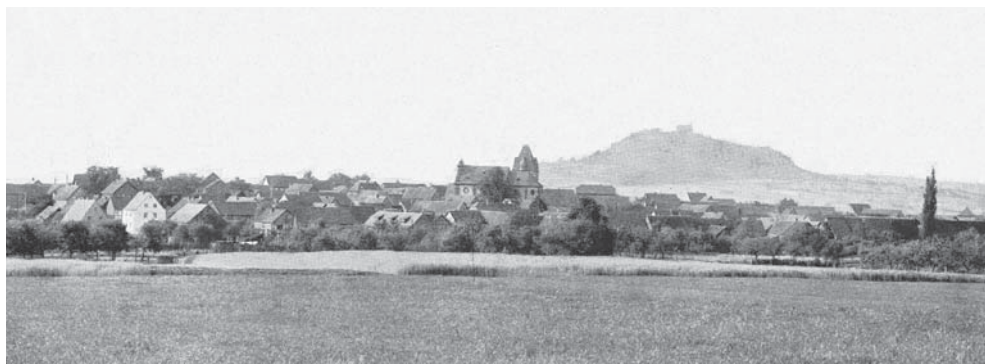
81) M. HAIN, *Trachtendorf* (前掲注 67), S.8.

82) 同上

83) 同上、S.9.

いる映像コードを解読することを試みた。筆者らは、映像構成や映像の部分、とりわけ観察者の位置について形体要素を分析した。そこから気づいたところでは、それらは、映像内容の明示を陰で支えているか、あるいは補正しているかであり、いずれにせよコメントになっており、その点では、研究者とフィールドの関係という今のテーマには興味深い。

最初の写真(写真5)は風景描写の伝統に立つ古典的なフォルム構成を見せている。全体は非常に横長で、水平な伸びの中央に村が映っている。その変哲もない前景から村へ通じる道は見あたらない。そのためひどくフラットな印象をあたえる。ただ輪郭ははっきりしており、村のシンボルが一目瞭然である。画面のちょうど真ん中に教会堂が立っている。そして霞がかかったようにアメーネブルクが半ば消えつつ写っている。二枚目(写真6)の写真では、マールドルフ村に到着したことになる。カメラはほとんど空っぽの小路を写している。中心透視図法で撮られた空間の両側には、右にも左にも同じような農家がシンメトリーに並び、それは観察者の眼に入る関係でもある。一口に言えば、農家が並ぶ村である。その次によやく人間がやってくる。はじめは子供たちである(写真7)。仰角のカメラアングルのためにほとんど幾何学的に正確なピラミッド状であり、頂点に一人が位置しているが、男の子であることは画面からはやや分かりにくい。同様の傾向をより明瞭に示すのは次の一枚(写真8)である。ここでは子供たちはシンメトリーな集団をつくっているわけではないが、にもかかわらず撮影者はそのカメラアングル(やや横よりの俯角)によって一つの型をつくっている。どの子供の衣装もはっきり見えると共に、やや上から観察される少女たちは衣装スタンドのように固まり、少女たちが全体としてつくる装飾は、手彩色のイースターエッグのかたまり(写真9)とほとんどそっくりの形状を示す。四方のどの面もがらんと空いていることから、同じ印象が起きる。子供たちの場合も大人たちの場合も、孤立し・まとまった・結集した集団を想起させる。一口に言えば共同体(ゲマンインシャフト)である。



5. マールドルフ村 背景はアメーネブルク

撮影 Ludwig Ph.M. Marck フランクフルト マティルデ・ハイン写真資料：マティルデ・ハイン『上部ヘッセンの民俗衣装の村の生きざま』(原書1936年)収録写真1



6. マールドルフ村の通り

撮影 Ludwig Ph.M.Marck フランクフルト マティルデ・ハイン写真資料 2

7. イースターエッグをもらおう子供たち 復活節第二日曜午後に華やかな衣装で名付け親を訪ねる子供たち マールドルフ村

撮影 Ludwig Ph.M.Marck フランクフルト マティルデ・ハイン写真資料 3



8. 聖霊降臨節行事の子供たち 花嫁と花嫁を先導する少女に扮した子供たちが聖霊降臨節二日目に村の通りを歩いて《卵料理作り》へ向かう マールドルフ村

撮影 Ludwig Ph.M.Marck フランクフルト マティルデ・ハイン写真資料 8

* [訳者補記] 花嫁を先導する少女 (Brautmädchen) : Blumenmädchen とも言う

9. イースターエッグ 娘たちはそれぞれの恋人のために鶏卵に詞章と装飾を卵をほどこすマールドルフ村

撮影 Ludwig Ph.M. Marck フランクフルト マティルデ・ハイン写真資料 27

働く人々の写真からは、ジャガイモの収穫を選んだ(写真 10)。苦しく・神経をつかう、そして膝をついて続けるために汚れる仕事である。しかし写真では、むしろ和気あいあいとした、ほとんど楽しそうな印象すら起きる。無言で並んで土を掘る女性たちは一つにま

とまっている。撮影には、見下ろすような高い位置が選ばれた。撮影者は俯瞰であるため、女性たちが見ている労働そのものとは別の見方になっている。女性たちは地平線の下にいて、地面ととけあっている観がある。果てしなく続く畝^{うね}はかき消えているが、それは畑の列には鋏がパチンと入れられてゆくからである。ちなみに^{xv}ジャン＝フランソワ・ミレーが描いた「働く人」などでは、農作業にいそむ人々が個人の力と意義において情熱的に表出される。それには、働く人々を地平線の上に出る角度で見ており、下に押し込まなかったことが与っていよう。その点で興味深いのは、この手段が用いられた別の写真、キリスト昇天の日（〔訳注〕復活祭から40日後の木曜）の耕地行列である（写真11）。人々の一団はすべて地平線から上に出ており、そして頭が同じ高さで揃っている。画面構成において同等性をきわだたせる手法^{xvi}イソケファリアである。画面が切られているために、人々の列はまだまだ続くかのようにあり、また遠い彼方へ消えてゆく。なお空に高く突き出ているのは、路傍の十字架であろう。そして画面上方にひろがる空白は、万物を同等にし、同時に万物の上にあるキリストの領域を示している。



10. ジャガイモの収穫 この仕事には最も着古した衣装を着ける 集めるために上衣は畝に広がっている
 撮影 Ludwig Ph.M. Marck フランクフルト マティルデ・ハイン写真資料 11
11. 耕地行列 キリスト昇天の日には村人たちは教会参りの衣装のうち簡素な出で立ちで祈り歌
 しつつ麦畑の間を歩む
 撮影 Ludwig Ph.M. Marck フランクフルト マティルデ・ハイン写真資料 30

数点の写真だけを分析することには、方法論的問題がまったくないわけではない。他にも《そうびったりとは合わない》わけではないものを併せるにしても。しかし作為的に選び出したとの疑惑をもつ人は、一度ハインの本を手にとって、そこでの写真を見ていただきたい。ここでは説明をできるだけ切り詰めたが、簡単にすませたのは、ハインの研究では、アナクロニズム的な画像を通して民俗衣装の女性がモニュメント化されているからである。そのテーマは共同体（ゲマインシャフト）でもなければ写真にあるのでもなく、民俗衣装の記念碑にある。それも固定してはいないが、没落を予感する恐ろしい物の見方で、色とりどりの端切れに身を包んだ人々は、無性の存在よろしく民俗衣装が唯一の関心事であるかのごとくである。それゆえマティルデ・ハインの言葉をそのまま受けとって、その写真や図版をそのコンセプトのなかに置いてみるなら、テキストを読むとき以上に、解釈者が窒息するのは疑えない。と言うのは、読者が出逢うのは、黙して自己の衣装がすべてといった人間だからである。しかし一枚だけだが、観察者を睨む鋭い目が光っているものがある（写真 12）。傷ついた人間存在が自分を追うカメラを睨んだのだ。民族衣装のマネキンさながらのはずが、反抗が起き、無邪気な衣装観察者に覲面にして相応の消えやらぬ恐怖を残したのである。

画家や写真家、さらに自己とカメラをごまかす者は誰であれ、自分たちの方もまたその

姿勢を捕捉される可能性がある。図像分析もまたそれを示している。単にドキュメントを添えるだけと考えている無邪気な企図も、習熟した人の眼にかかれば、化けの皮をはがれ、イデオロギーの影響をもちうけた試みという正体を露呈する。図像はコメントであり、独自の言葉である。より優れたドキュメント作りでこれを否定しようとしても成功するまい。むしろ、一見ではドキュメントづくりと映るどんなものにも、かかる主観的な立脚点を探し出した上で、それに接することを学ぶのが大事であろう。



12. ミサに参集した少女たち プロテスタント教会系のマールブルクの衣装は黒と白だけのみ
 じめな装い 黒い《頬あて》の上に白い頭巾を着ける

撮影 おそらく Ludwig Ph.M. Marck フランクフルト
 マティルデ・ハイン写真資料 44 (部分)

模索する現代のフィールドワーク

ここでの検証が、それにあたっての思念の故に過度の裁断へ進まないことが望まれるが、それはともあれ、行程の最後に、現代の二つのフィールドワークを取り上げたい。それらにおける民俗学の眼とはどのようなものであり、そこでは現代の研究者たちがフィールドとどのようにかわり、またフィールドへの姿勢がどうであるかを問うのである。

(ブレードニヒのサスカチュワン調査)

一番目は、^{xlvii}ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒが行ない、ドイツ民俗学会の機関誌に発表した^{xlviii}カナダのサスカチュワン州でのプロジェクトである⁸⁴)。1975年秋、ブレードニヒは、ロシアから逃れたドイツ系の^{xlix}メノー派信徒たちのもとに滞在して、その報告で自ら記したように、方法論上の問いにも取り組んだ。彼に調査を依頼したオタワのエスグラフィー博物館は専ら《宝堀りの眼》による収集活動に関心を寄せていたが、にもかかわらず彼は、伝統的な研究方法からの決別を図った。

ブレードニヒは、フィールドへ足を踏み入れた経緯を克明に記録した。そのため一つ一つの行動を精確に知ることができ、逆に透明性の高さのゆえに批判も可能である。これは疑いもなく、彼の研究における大きな長所である。とりわけフィールドへの最初の一步は、すこぶる重要な前段階であった⁸⁵)。と言うのは、特定の認識・整理の手法がそこですでに行われたからで、それは日常的には一目惚れの合言葉で言い表されるものだけでなく、多

84) Rolf W. BREDNICH, *Projekt Saskatchewan. Neue Aufgaben und Methoden volkskundlicher Empirie*. In: ZsfVk 1977, S.24-41.

85) それゆえ、エスロジャー関係文献を相手にするこのイニシエーション期には特別な意味が付与される。ロザリー・ウォックスはこの項目を《フィールドワークにおいて最初に来る最も憂鬱なステージ (The First and Most Uncomfortable Stage of Fieldwork)》と呼んだ。さらにウォックス女史はこの章 (p.15-20) において、さまざまな研究者が味わったありとあらゆる困難を取り上げている。カーペンター (Carpenter 1965) は《精神的な欠陥者のよう》に感じる数か月を経験した。彼女は、日本で《政府のスパイ》のように見られた。フランツ・ボアズ ([訳注] Franz Boas 1858-1942 ドイツ生まれのユダヤ人でUSAの人類学者、カナダのイヌイットの調査で知られる) ですら嘆いた。《人々をぎりぎりまで追い詰めるこの道しかない。私は、ここから逃げ出せて大変うれしい。もう仕事にならないからだ。それほど、インディアンたちは厄介なのだ》。ウォックスは最後にマーガレット・ミード ([訳注] Margaret Mead 1901-78 人類学者、ルース・ベネディクトに就き、コロンビア大学助教授) のオマハ (Omaha [訳注] ミネソタ州の都市で現在は人口40万人、多くのエスニック・グループが存在する) での経験を引用する。《エスロジャー的に言えば、まったく気持ちが萎えるような仕事。たとえばある人の父親か叔父さんが幻影を見たことを知ったとする。その人物に遭うためには4回も足を運ばなければならない。8マイルか9マイルの道のりを通訳を連れて車で行く。一回目は本人は留守。二回目は酔っぱらっている。その次は夫人が病氣。そして四回目にインタヴューを始めるのだが、通訳のアドヴァイスもあって5ドル紙幣を握らせる。すると奴さんはワカンダ (Wakanda [訳注] こは Wakan Tanka ワカン・タンカすなわちアメリカ・インディアンのスー族の創造神を指すが、また一般にはむしろ人気コミックの架空の国名としてよく知られている) に感謝を捧げ、ワカンダが彼に長命をさずけてくれるように祈る。そしてその後、嘘話を4時間も喋りつづける》(Rosalie Wax, *Doing Fieldwork. Warnings and Advice*. Chicago 1971, p.17f.)

くの第一印象から知られるものにまで延びていた。ちなみにサイコセラピーの教えるところでは、最初の5分の出会いには、何年にもわたってようやく明るみに出たり作用力を発揮するものがすでに含まれている。それゆえ、フィールドワーカーとしては、あの最初の出会いにより注意をはらうことが何よりも意義多いと思われる。人は、自分自身も興奮や不安のなかにあるため、とうてい状況への眼も耳も持つてはいないからである。

ブレードニヒの最初のコンタクトの相手は、《さまざまな派に分かれたメノー派教会のなかの最も重要な分枝》であった⁸⁶⁾。教会をパートナーとする調査研究だったが、そのなかの最も重要な一派である。調査の対象となったのが、若者や教会には行ったり行かなかった人々などではなく、信仰心のある多数派だったことは、状況の分析にあたって大きな意味をもった。そして、これに続く状況は、それまた教会の長で、最も年季の入った人物とのコンタクトあった。ちなみに大多数のフィールドワーカーは、上からフィールドへ入ってゆく傾向にある。すなわちオフィシャルなお墨付きを期待するのである⁸⁷⁾。しかしブレードニヒの場合は、次に地方新聞と接触した。これは、独自の真実と真剣さを示すためには、最も好ましいメディアと言ってよい⁸⁸⁾。いずれにせよ、歩みがどのようであれ、扉を開けることがめざされたのである。ブレードニヒも目にしたように、元のふるさと出身のドイツ人であっても、メノー派の人々の中に簡単に入ることができたわけではない。客として扱われるには、外来者への通常態度ではなくなるための明らかな調停が必要で、努力は挙げてそれに向けられることになるだろう。

彼らの信頼を贏ち得てはじめて、国外ドイツ人のもとにやってきたフィールドワーカーを自慢するほどにまでホスピタリティを示すことになる。

たしかにホスピタリティは、扉が開かれている標識である。しかし同時にそれは、退却した上での《主戦場の区画》をも示している。外来者が扉を通して入ってきてはじめて、私は、その外来者に、ホスピタリティの規準の下に置き、彼に一つの場所を指定することになるが、それは、変化をきたしはしたが、明瞭に規則づけられ、距離を組み込んだ規準に照らして機能する配置の中にいる自分を感得するためでもある。それはもはや信頼などではないかも知れず、むしろ未整備な近さへの不安でもあるのではなからうか。ブレードニヒ自身はこう自問する。《人間の信頼を得るのは、そもそもどのようにしてなのか?》

86) BREDNICH (前掲注 84), S.34f.

87) Thomas LAU und Stephan WOLFF, *Der Einstieg in das Untersuchungsfeld als soziologischer Lernprozess*. In: *Kölner Zs.* 1983, S.417-437.

88) キーピング村の調査のあいだ、私たちは繰り返し地方新聞にコメントを掲載した。それは、意義を了解してもらうためだったが、水面下では恐れのようなものを送り込むことにもなった。奴らの背後には《新聞》がある、となったのだから。

フィールドワーカーなら誰しも悩んだことのある問いである。また、非常に真剣にとるならば、相方のインフォーマントに当然にも不信を醸成してしまいかねない問いでもある。信頼獲得と言っても、この問いにおけるように、機関の活動としてそれがめざされるときには、すでにそれによって、芽生えつつある信頼の土台がそこなわれている。基本的にそういう問いをするのは、セールスマンや結婚詐欺師や賭博のディーラーであり、実際の自分とは異なった何ものかを演じている。実にフィールドワーカーのディレンマだが、何ごとかを得ようとする（ブレードニヒはこれを成功と呼ぶが）、そしてこの目的のためには、（少なくとも日常では目的とは結びつくことがない種類の）特定の手立てを講じることになる。実際、誰かが私との関係で何か成功しようとしているときに、私の信頼を贏ち得るだろうか。その誰かが《ある役割を……プレイすることを考えているときに》、その誰かが、実はフォークロリストであることを名乗らないでいるときに。《もっとも、それは、アメリカ人の相方が、フォークロリストと聞けば、メノー派信徒のあいだでも必ずしも知られていないメルヒェンや伝説あるいは民謡を聯想してしまうからだったのだが。それもあって、私は、ソーシャルワーカーをロールプレイングすることを選んだ》、とブレードニヒは記している⁸⁹⁾。すでにリールが、フィールドでは半ば嘘をつくことも時には必要だ、と語っていた。事実、フィールドワーカーなら誰でも、屢々中途半端ではいられ

89) BREDNICH (前掲注 84)、S.35. しかしブレードニヒは、研究者がフィールドを決定づける役割の可能性に不均衡なものをみとめる。フィールドは、それによってしばしば不快な驚きに見舞われる。私自身も、ドクター学位のゆえに医師としてのアドヴァイスをもとめられたことが何度かあった。民俗学の博士では話にならないが、法学博士でもそうした期待が起きるだろう。しかしエスノログでも、罪はないことだが、間違われることが少なくない。《たとえば、モハーク族 (Mohawk モヒカン族とも：アメリカ・インディアン一派) の鉄鋼労働者は、私を、家を探している放浪の学者とで思っただろう。私が、仕事を見つけることには関心を示さず、しかもいつも〈彼らの〉のバーに座っているからである。またトリニダードの人々は、私を所得税にかかわる税務署のスパイとみなした。無理もない。私は政府の建物に泊まっていたのだ》。参照、Moris FREILICH (ed.), *Marginal Natives at Work. Anthropology in the Field*. Cambridge Mass. 1977, p.2f. [訳注] M. FREILICH は 1928 年にワルシャワで生まれたアメリカの人類学者。イリノイ大学・セントルイスのワシントン大学を経て 1966-74 年はボストンのノースイースタン大学で人類学の教授であった。；外来者のエスノログがスパイと間違われるのは、よくあることで、決して思いがけないことではない。《ブラック・ノヴァスコシアン (Nova Scotian Negroes [訳注] 18,19 世紀にアメリカからアフリカ系奴隷とその子孫がカナダのノヴァスコシア州に移住し、今日も 2 万人余りが住む) は白人をスパイとみなした。サモア島民の二人の女性は、ロバート・マクスウェル (Robert MAXWELL) が〈スパイ活動をしている〉との噂を流した。ウガンダのトロ族 (Toro) の数人は、マーヴィン・パールマン (Marvin PERLMAN) を政府のスパイと見……インドのクーリーたちはジョン・ホニグマン (John HONIGMANN) をアメリカ空軍基地に属するスパイと考えた》(同上、p.3)。フライリヒは、ブレードニヒと同様、何か話をつくることを勧めている。《たとえば私の場合、イロコイ族の歴史の一部として現代のモハーク族に関心を持っている、つまり昔の偉大な戦士の子孫たちの生き方に生き方への興味があると説明した。またトリニダードでは、熱帯農園と関連の文化実態の研究者と名乗った》(同上、p.3)。外来者が実際とは違った自己紹介をするとき、地元民はその人物をどう理解することになるだろうか。相互に不確かな臨み方をする契機を意味するため、これ自体、エスノロジーの研究課題と思われる。たとえば私の前に現れた研究者が、辞典の販売人あるいは前科者だと名乗るなら、私の方は、事典はすでにもっていると返答するだろし、さらに借金を抱えているとも言うだろう。

ないことを知っている。しかしそれゆえに、信頼を言い立てたり、特に目的がないふりをするのは、やはり好ましくない。研究者とインフォーマントの関係は、仕事の結びつきであり、そこに誤った約束が持ち込まれてはならない。さもなければ、一方には多くを経験することを得させ、詰まるところ、インフォーマントたちにはその役割を勘違いさせることになる。その点でブレードニヒの¹フッター派の友がもらした言葉は、そうした行為をすべきでないとの絶望的な警告になる⁹⁰⁾。

何はともあれ、立ち寄ったのですが、そういうことはこれまでなかったのですが、そして顔を見せて、教授、次にいつか来るときは、私たちのところへ居て下さい、四日しかじゃありませんか！てね。貴方は、私が英語で言ったようには《too attached (つよく結びついて)》います。あの方が行ってしまったときもそうですが、貴方が明日発つわけで、二日か三日でも、貴方は《減入って》いますね。

これを、ブレードニヒはこう解釈する⁹¹⁾。

最後の言葉で、彼は訪問者に対してふたたびある種の距離をとった。訪問者のもとに顔を見せ、理想的なまでの公正さで《ではこれで》という言い方をして、自分の当惑ぶりを示した。

筆者は、不安をかきたてるほどにまで思いやりが欠如しているのを感じてしまう。別れへの友の悲しみ（あるいは彼自身の悲しみだろうか？）が耐えがたいかのようであり、それゆえ疑似学問的な世間一辺倒のお愛想に逃げる他ないかのようである。

こうした相互関係は、密度の高い多くのフィールドワークにおける亀裂を明るみに出す。研究者と対象という水準と並行して、別の関係の水準も屢々存すること、すなわち好意・反感・細かな点では憎悪や時に愛情らしきものも起きてくる。それをどうするべきか。そうした感情は二面性に根ざしている。パートナーに、後で本を書くことになるだろうという程度の友情にとどめると、パートナーの感情を傷つけ《がっかり》させてしまう。逆にしっかり友情をはぐくみ、その感情を大切にすると、後で本を書くことはできなくなる。それは調査研究の依頼者を怒らせてしまいかねず、あるいはキャリアはそこで止まってしまふ。明確な解決はないが、自己の安全と相手の安全のためにはある程度の距離が欠かせないとするブレードニヒの便法には確かさがある。これを実現させるのは、調査にあたっ

90) Rolf Wilhelm BREDNICH, *Zum Stellenwelt erzählt Lebensgeschichten in komplexen volkscundlichen Feldobjekten*. In: BREDNICH, LIXFELD (Hg.), *Lebenslauf und Lebenszusammenhang*. Freiburg 1982, S.46-70, s.S.64.

91) 同上、S.63.

てメモ帳を用意し、その時の自分の感情を、それもできるだけ正確にかみしめて、かりそめではあれ信頼を予め築くことによってであろう。

(人間らしさと学術調査のはざままで——ザウアマン)

事実それは可能であろう。素っ気なくいなすようなことをしなくても、できないわけではない。自己のはたす役割を良心に照らして検証するさいに誠意と学問性を結びつけることはあり得よう。そうした自己弁護を証明したのは⁹²⁾ディートマル・ザウアマンで、特にフライブルクの研究大会でのラルフ・ドゥンクマンとの共同発表においてであった⁹²⁾。ザウアマンもやはり二重の関係を経験した。職務上のコンタクトを超えてプライベートにも訪問やプレゼントをする《共同研究者や資料館職員との間の多少とも親密な信頼関係》ができていった⁹³⁾。そしてこの親近な水準がもたらす成功をザウアマンも享受した。

コンタクトが密接になればなるほど、情報提供者は親切で活発な伝え方をしてくれた。知らせてくれる中身も多彩かつ細部にわたるようになった。

しかしザウアマンは、自分の感情をたしかめるなか、問題点もあることに気がついた。

個々人が求めに応じるべき存在となるのが、時と共に、私には問題と思えてきた。コンタクトの人間的な側面が次第に大きな懸念となり、私は《本来の》仕事、すなわち学術作業の方は自分のなかで、むしろ小さなものになっていった。会話や訪問の多くは関係を強めるだけのものになること、あるいは高齢者の世話に終始することも屢々であった。

不快な思いが募り、遂にザウアマンは、そうした仕事仲間の世話をきっぱりやめた⁹⁴⁾。そして関係をあっさりしたものにとどめることによって、学問性を何とか救い出した。厳格に過ぎたかもしれないが、ありのままの気持ちの方を大事にしたのである。

コンタクトを再開したのはずっと後になってからであった。しかも《人生歴にかんするインタビューをおこなう》意図をはっきり告げてであった。その時には、友人としての近しさを故意に狙わず、仕事の意図をはっきりさせることが顔を合わせる上でのベースとなった。それゆえエモーションなオフサイドは通用せず、パートナーシップは大きく揺らいだ。自分の《身体はガタガタだ》とドゥンクマン氏が話したわけではない。ザウアマ

92) Dietmar SAUERMAN, *Gedanken zur Dialogstruktur wissenschaftlicher Begragungen* (前掲注 90), S.145-153.

93) 同上, S.146.

94) 同上, S.147.

ンも《息子を失ったことを涙ながらに》告白し、どう言い続ければよいのか《途方に暮れた》。と、我知らず彼は、会話を《研究発表につかう》つもりであることを口にした。のみならず、材料をとりあげることへの躊躇がどこから来るのかについて感じるどころがあった⁹⁵⁾。

調査作業は知的な案件であるにとどまらず、自分自身にも疑問を突きつけずにはおかない。

もっとも、事前の検討でも、《会話は自分自身の一部》とザウアマンは記していた。関心が家屋構造とクリスマス祭にあることも告げ、政治は関心外として除外した。さらにザウアマンは、ドゥンクマン氏が彼から何を得たか、逆に彼がドゥンクマン氏から何を得たかをも説明した。ドゥンクマン氏は、代理人でもある自分の息子と話し、戦死者に伝えるべくもなかった経験を息子に語った。ディートマル・ザウアマンは、聞き手の役割を辛抱強く果たす代わりに、意義多い著作や興味深い講演や変わり種の学問的好奇心の材料を獲得した。

かくして調査は、細やかな感情に裏打ちされた鮮やかな交換作業となった。パートナーのどちらも損をせず、それゆえ《がっかり》せずにすんだ。ザウアマンの作業を特徴づけ、他に擢んでるものとしているのは、彼の民俗学の眼に妥協がなく、とりわけ自分自身に正直なことである。そのために、彼は、範とするに足る補助手段を講じ、またそれを講演記録の最後に掲げた。その表示は委曲を尽くしている。

一人の研究者の経験と感情の記録：会話、および当該研究者が会話の当事者となったコミュニケーション構造の分析、さらにその会話と当該研究者の役割をめぐるインタビュー・パートナーとのディスカッション

ザウアマンについては、手仕事の秘密(コツ)を《もらす》のではなく、情報提供者と研究者の間の謎多い連繋を問題としてとらえた最初の民俗学者と言ってよいかも知れない。方法論者ならコツを規準に則って使いこなすことを重視し、指南を事とする者なら方法論者を追いかけて、古いコツが分かり切ったものとなった後に成り立って残り続けた新しいコツについて語るだろう。してみると、指南者は体系家の後を足ひきずって歩むかのようであり、また現実にも問いを立てはするが、それは体系家が解決を試みながらも個々の事例までは進めなかった種類のものである。

ちなみにⁱⁱⁱカルロ・ギンズブルグは、ⁱⁱⁱⁱガリレオのパラダイムと並んで《兆表のパラダ

95) 以下の引用すべては同上、S.147-152.

イム》も存することを明らかにした⁹⁶⁾。それは、主観による真実統御に到達する技術がなお発達するには至っていないときに、真実の痕跡を追うというあり方を言う。^{iv}ジョヴァンニ・モレッリ（さらに上を行くのは^{iv}ジークムント・フロイトだろうが）は、個々の目立たない徴候から真実あるいは錯誤を読み解くことができた。モレッリの仕掛けは見本の性格をもっている。彼は、巨匠作品の贋作を見破るにあたって、顔の典型的な表現などを追うのではなく、人が注意しない目立たない部位（耳など）の描き方で贋作者がぼろを出すと考えた⁹⁷⁾。これは心理分析における自由聯想のありかたでもある。つまり、理性の本道を避けて、没理性のかすかな音に耳をすまし、無意識とその法則を読み解くのである。文化研究のフィールドワークが将来おこなってであろう微細な分析もこれと似たような手続きをとる他ない。それには、緻密に見、緻密に聞くことを学ばなければならない。フィールドだけでなく、錯綜した自己自身をも。

民俗学のディスカッションにとってザウアマンが重要なのは、実際に具体的に、また個人的にも研究のなかに身をおき、しかも（理論的には定礎者であり高い説得性ももっていた）^{vi}ジョージ・ドブローをはじめとする大御所の陰に隠れたりしなかったからである。この潔い立ち位置のゆえに、その研究には個人の重みがある。筆者は、フライブルクでの講演だけでなく、そのレクチャーにおいても深い感銘を受けた。自分も経験しながら明瞭には認識しようとはしなかった何かを、そこで再発見するからであろう。ザウアマンは、自己の欠陥や弱さを公にみとめる能力を持っており、それは学術界ではめったに見られず、尋常ではない強さの確かな標しである。

兆表のパラダイム、また主体に軸足をおいた方法への批判は、もはやその手法ゆえにではなく、むしろ他の研究者それぞれからなされるものとなってきている。そうではあれ、一つには（フィールドワークの一方の極である）指南者的な立場の潔癖さが民俗学の分野では大きくなってきており、二つには方法論の反省が進展したため、やはりそれは今後も貫かれると筆者は考えている。ちなみに方法論的な反省では、^{lvii}マックス・マター⁹⁸⁾と^{lviii}クラウス・F・ガイガー⁹⁹⁾がそれを行なってきた。彼らは論考を通じて現実的にも確かな分析をおこない、フィールドにおいても方法論の反省においても研究の進展に尽力した。（調査研究の現場での）独特の当惑は理論的に解決され、その点では副次的となり、認識の手立てとしては齷の生えたものであろう。しかし（理論的に理解しその都度の特殊な性格を一般化する身構えを別として）変哲もない当惑は自虐的であり疲れがつのる一方である。民俗研究の眼をよ

96) Carlo GINZBURG, *Spurensicherung*. In: GINZBURG, *Spurensicherungen*. Berlin 1983, S.61–96.

97) モレッリについては次を参照、Ernest WIND, *Kunst und Anarchie*. Frankfurt 1979, S.40–55.

98) マックス・マターは一見控え目なタイトルの裏に読解と考量に値する思念を託した。参照、Max MATTER, *Gedanken zur ethnologischen Gemeindeforschung und zu den dafür notwendigen Datenerhebungsverfahren*. In: Rhein. Jahrbuch für Volkskunde, S.283–311.

99) Klaus GEIGER, *Probleme des biologischen Interviews*. In: Freiburger Tagungsband (前掲注 90), S.154–181.

り精確かつ鋭敏にし、同時にその特殊性と問題の方向を限定しないことは、これからの課題である。それは、フィールド研究の積み重ねとそれを毎度粘り強く方法の側から反省的にとらえることなくしては解き得ない。

訳注

- i (164) 民のいとなみ (Volksleben) 19世紀後半以来、民俗学が対象とする諸事象はこのキーワードで言い表されてきた。それゆえ第二次世界大戦後は検討すべき語とみなされた。なおこの語は、民俗学の刷新を牽引してきたチュービンゲン大学の研究者の組織が編集する叢書名であるが、改革指導者パウジンガーがそれを選択したのは、永くこの語がドイツ民俗学の問題のある結節点となってきた経緯を踏まえ、その課題と常に向き合う趣旨からである。
- ii (164) カイ二乗検定 (Chi-Quadrat-Test / χ^2 検定) 日本工業規格では、『検定統計量が、帰無仮説の下で χ^2 分布に従うことを仮定して行う統計的検定』と定義される。
- iii (165) SPSS (Statistical Package for the Social Sciences) IBM の統計解析ソフトウェア・パッケージ。
- iv (165) ピジン語的方法論 (Pidgin-Methodik) ピジン語は、異言語間の意思疎通のために互換性のある代替単語で自然に作られた接触原語を言う。フィールドワークもそうした異文化間の接触であることを譬えている。
- v (166) ヴォルフガング・ボンズ (Wolfgang Bonß 1952-L) ヴェストファーレンのハーゲン (Hagen NRW) に生まれた社会学者。ミュンヘン大学で社会学・政治学・ゲルマニスティク・歴史学・法学を学び、1981年にビーレフェルト大学で学位、1995年にブレーメン大学で一般社会学の分野で教授資格を得た。1995年ミュンヘン連邦軍大学の社会学の教授となった。社会学の学問論に厚い知見をもつ。イエグレの本稿との関りでは、『実事の眼』は原注に挙げられるボンズの著作のテーマである。
- vi (167) ヘルムート・メラー (Helmut Möller 1926-2013) 1960年代に民俗学の歴史・方法論・社会史とのまたがりなどで新しい視点を提示し、著作・論考の点数は多くはないが、いずれもドイツ民俗学のその後に影響をあたえた。ゲッティンゲン大学で教えた。
- vii (167) ヨーハン・ペーター・ズースミルヒ (Johann Peter Süßmilch 1707-67) ベルリン市域のツェーレンドルフ (Zehlendorf bei Berlin) に生まれ、ベルリンに没した牧師・統計学の先駆者。イエナ大学とハレ大学で医学とプロテスタント神学を学んだ。従軍牧師を経て、ベルリン＝ケルン区域のベトリ教会堂の総管となった。先人の資料と自身の疫病調査をもとに統計学につながる著述をおこなった。特に『神の秩序』(Die Göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts, aus der Geburt, dem Tode und der Fortpflanzung desselben erwiesen. 1741) において、男女の長期的な出生率が1050対1000となることを解明し、疫学統計・人口統計学の先駆者とされる。
- viii (167) ゴットフリート・アッヘンヴァール (Gottfried Achenwall 1719-72) プロイセン王国時代に西プロイセンのエルビング (Elbing 現ポ Elbląg) に生まれ、ゲッティンゲンに没した啓蒙主義の法学者・内帛学者で統計学の定礎者。イエナ、ハレ、ライプツィヒの諸大学で法学を幅広く学んだ。マールブルク大学で私講師を経て、1761年にゲッティンゲン大学の員外教授、1766年に同大学の自然法と政治学の正教授となった。イギリスをはじめ各国の枢密顧問官であった。1749年に初版の後改稿されて今日のテーマとなった『ヨーロッパ諸国の構造概要』(Staatsverfassung der Europäischen Reiche im Grundrisse.1752) 等によって経済学と、特に統計学の形成に大きく寄与した。
- ix (167) フェーリックス・クナッフル (Johann Felix Knaffl 1769-1845) オーストリアの財務官僚で、(今

日と言えば) 財務省地方局長のようなポストであった。その手稿は赴任した上シュタイアマルク地方の克明な民情調査をまとめており、献上したヨーハン太公の民衆への関心と思潮的に重なるところがあつたようである。手稿にはその地方出身の画家レーダーヴァッシュ (Johann von Lederwasch 1755/56-1826) による水彩画が添えられている。永く未完であったが、1928年にヴィクトル・フォン・ゲラムプが部分復刻した。しかし民俗学らしいと思われた箇所に限られ、社会経済的側面(たとえば税金のデータ)は省かれたとして、イエグレは批判している。なおレーヴァーヴァッシュの水彩画を含む紹介は次の拙著を参照、河野『民俗学のかたち——ドイツ語圏の学史に探る』(創土社 2012)、p.32-36「フェーリックス・クナップルの調査記録とその復刻版をめぐる」及び口絵 I,II。

- x (167) ディーター・ナル (Dieter Narr) 原注に挙げられているヘルマン・パウジンガーとの共同論文の他に次の単著(これ自体は重要な研究成果)がある以外は不明。参照、Dieter Narr, *Studien zur Spätaufklärung im deutschen Südwesten*. 1978.
- xi (167) ヘルマン・パウジンガー (Hermann Bausinger 1926-L) 独バーデン＝ヴュルテムベルク州アーレンに生まれた民俗学者。チュービンゲン大学でゲルマニスティク・アングリシスティク・歴史学・民俗学を学び、19529年に「語り物の現在」を論じて同大学で学位、1959年に「科学技術世界のなかの民俗文化」で同じくチュービンゲン大学で教授資格を得た。1960年にチュービンゲン大学教授として民俗学科を主宰し、1992年に定年となった。戦後まもなくから折にふれて問題視されてきたナチズムに傾斜した民俗学のあり方に独自の視点で取り組み、それを方法論に活かして、1950年代から民俗学の改革を主導し、日常研究のディシプリンを切り開いた。
- xii (167) フリードリヒ・ニコライ (Christoph Friedrich Nicolai 1733-1811) ベルリンに生まれ没した啓蒙主義の文筆家。書店主の子として生まれ、ハレ、フランクフルトで修業と経営術習得の後、1752年に父の死によって事業を継いだ。早くから啓蒙主義文筆家の自覚をもち、1755年には書簡体の藝術・学術評論によって広く知られた。レッシング、ツェルター、哲学者メンデルスゾーンと親交をもった一方、カントとヒヒテを敵視した。百科事典的な旺盛な文筆家であり、特に『1781年のドイツ・スイス紀行』(*Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz im Jahre 1781*. 12 Bde. Berlin u. Stettin 1783-1796) や『ヨゼフィニズムのウィーン』(*Aus dem Josephinischen Wien. Geblers und Nicolais Briefwechsel 1771-86*, hg. von Richart Maria Werner. Berlin 1888) は見聞・思索録として資料価値が大きい。
- xiii (169) トーマス・クーン (Thomas Samuel Kuhn 1922-96) 米オハイオ州シンシナティに生まれ、マサチューセッツ州ケンブリッジに没したアメリカ合衆国の科学哲学者・科学史家・ドイツ系ユダヤ人。ハーヴァード大学で物理学を専攻し、1949年に科学史の分野で PhD. を得た。カリフォルニア大学バークレー校、プリンストン大学、マサチューセッツ工科大学の教授を歴任した。1962年に刊行された主著『科学革命の構造』においてパラダイム概念を提示し、科学の発展をパラダイムシフトとして説明して、(反論も含めて) 大きな反響を呼んだ。
- xiv (169) アヒム・フォン・アルニム (Achim von Arnim 1781-1831) ベルリンに生まれ、ヴィーパースドルフ (Wiepersdorf = 現 Niederer Fläming 町の一区画 Kr. Teltow-Fläming BB) に没したロマン派の詩人。1798年から1800年までハレ大学で法学・自然科学・数学を学んだ。次いでゲッティンゲン大学へ移り、そこでゲーテと遭い、またブレンターノと出逢った。クレーメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano 1778-1842) はライン河とマイン川の合流点付近エーレンブライトシュタイン (今日の Koblenz-Ehrenbreitstein RP) に生まれ、下フランケン地方アシャフェンブルク (Aschaffenburg BY) に没したロマン派の詩人。1797年からハレ大学で山岳研究を、翌年からはイエナ大学で医学を学んだが、学業を終えるまでに文筆に進んだ。1801年からゲッティンゲン大学で哲学を学び、その時期にアルニムと知己になっ

た。1804年にハイデルベルクへ移り、やがてアルニムと共に歌謡集『少年の魔法の角笛』3巻（1805-08）を編んだ。

xv (169) ヨーハン・ハインリヒ・フォス (Johann Heinrich Voß 1751-1826) メクレンブルクの小村ゾマー
ストルフ (Sommerstorf in Grabowhöfe Lk.Mecklenburgische Seenplatte /Müritz MV) に生まれ、ハイデルベルクに没した詩人。1772年からゲッティンゲン大学で哲学と古典文献学を学び、また当時の詩人集団の先駆けとなる「ゲッティンゲン社の詩人結社」をリーダーとして結成した。ラテン語教師の後、1782年にオイティーン (Eutin SH) のギュムナジウムの校長となった。1802年にイエナへ移り、近隣のヴァイマルのギュムナジウムの教授となった。1806年にバーデン大公国政府からハイデルベルク大学自由教授（職務はなく高給の待遇）の誘いを受けて応じた。青年期から詩才を見せ、特にイデュレのジャンルではザロモン・ゲスナーと並ぶ代表的作家であった。またホメロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』を原典から訳し、シェイクスピア劇を英語から、『千夜一夜物語』をガランによるフランス語版から翻訳した。文藝評論家としても影響力があった。

xvi (171) ルイ・カッツェンシュタイン (Louis Katzenstein 1824-1907) カッセル (ヘッセン州) に生まれ没した肖像画家。カッセルの造形藝術専門学校 (今日のカッセル藝術大学) に学び、次いでパリで新古典主義の画家レオン・コニエ (Léon Cogniet 1794-1880) に就いた。ローマに滞在して当時の風俗画を習得した。1448年にドイツに帰り、また1852年からしばらくポルトガルで肖像画家として活躍した。文筆家でもあった。

xvii (173) ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール (Wilhelm Heinrich Riehl 1823-1897) ライン河畔で現在はヘッセン州都のヴィースバーデン市域となっているビーブリヒ (Wiesbaden-Biebrich) に生まれ、ミュンヘンに没した文筆家・ミュンヘン大学教授。青年期からジャーナリストで達意の文筆家として知られた。革命ではなく社会改良を説き、また保守性が喜ばれてバイエルン国王にミュンヘンに呼ばれ、ややあってミュンヘン大学教授となった。精彩に富んだ多数の民俗記述を残し、また『学問としての民俗学』(Volkskunde als Wissenschaft. 1858) という有名な講演もあって、学問的な民俗学の父とも讃えられ、今日まで高い評価を受けている。とりわけ、グリム兄弟以後のロマン派の民俗学（神話学的潮流と呼ばれる）が上古の名残を追って珍習奇俗を収集し過大な意味付けに走る欠陥を露呈させるに及び、その修正を図ろうとする方向からは、力強い指標として常に名前が挙げられてきた。第二次大戦後、ナチズムとの同調に至った従来の民俗学の克服が課題になったときにも、先ず起きたのは〈リールに返れ〉という呼びかけであった。しかしまたリールについては、20世紀初頭からナチズムにいたるドイツのナショナリズムの激化のなかで、その流れに沿って好まれてきたという脈絡もみられる。さらにリールの思想そのものも、1848年の三月革命への保守的対応という面が強く、その流麗な文章も必ずしも現実を描写したものではないという批判が、戦後は起きることになった。

xviii (173) スカートとキャミソルの言い回し ドイツ民俗学の里程標として知られるリールの講演『学問としての民俗学』(1858年)のなかの有名な一節で、個別事象は幅広い関連のなかに置かれるのでなければ無意味であるとの文脈による。

xix (174) ギュンター・ヴィーゲルマン (Günther Wiegmann 1928-2008) エッセン (NRW) に生まれた民俗学者。ケルン大学で地理学・ゲルマニスティック・民俗学を学び、1955年から1966年までフランクフルトとボンに拠点がおかれた『ドイツ民俗地図』の編集作業に助手としてたずさわった。1957年にケルン大学で農耕民俗の地理的研究で学位を、1966年に『日常食と晴れの食』の研究によりボン大学で教授資格を得た。マインツ大学を経て、1971年にミュンスター大学の正教授となって同大学の民俗学科を主宰し、1993年に定年となった。伝統食研究の分野での第一人者として知られる。1969年から1977年

までドイツ民俗学会 (DGV) 会長を務めた。

- xx (174) ハンス・モーザー (Hans Moser 1903-1990) : ミュンヘンに生まれ、ゲッティンゲンに没した民俗研究者。ミュンヘン大学でゲルマニスティク、演劇学などを学び、1927年にキーファースフェルデンの民衆劇 (*Volksspiele in Kiefersfelden*) の研究で学位を得た後、プロイセン・アカデミで古文書調査の職についた。1950年に兵役と捕虜から帰還し、バイエルン地域民俗研究所 (Bayrisches Institut für Volkskunde) を主宰した。早くから厳密な史料に裏付けられ民俗学を標榜し、その主要な研究対象とした民俗行事について地方・村方文書を精査して歴史的経緯の解明につとめた。その研究姿勢は強い方法論意識を伴っており、歴史民俗学のモデルケースを提示するものとして大きな影響をあたえた。またフィールドワークによって得た経験から、多くの民俗事象が近・現代において本質的な変化を闊したことを指摘し、折から新世代の旗手ヘルマン・パウジンガーが発表した〈古習の延命ではなく近・現代世界の表出形態としての民俗文化〉の理論を積極的に取り入れてフォークロリズムの概念を民俗学に導入した。それも含めて、第二次世界大戦後のドイツ民俗学の展開の上で里程標となる論争の幾つかにおいて一方の論客であった。
- xxi (174) ヘルゲ・ゲルト (Helge Gerndt 1939-L) ドレスデンに生まれた民俗学者。キール大学とウィーン大学で民俗学・ゲルマニスティク・地理学を学び、1966年にキール大学に「さまよえるオランダ人と船幽霊——海の形象」で学位を、1973年にミュンヘン大学で巡礼慣習の研究で教授資格を得た。1979年にレーゲンスブルク大学教授となったが、翌1980年にミュンヘン大学民俗学の主宰となり、2004年に定年を迎えた。その間1987年から1991年までドイツ民俗学会 (DGV) 会長をつとめた。
- xxii (174) ゲルハルト・ハイルフルト (Gerhard Heilfurth 1909-2006) エルツ山地のノイシュテッテル (Neustädte) に生まれ、マルブルクに没した社会学者・民俗学者。鉱山・手仕事・牧師などの家系にそだち、ライプツィヒ、ハイデルベルク、パレルモの諸大学で社会学・歴史学・民俗学・宗教史などを学び、1935年にエルツ山地の鉱山者の民謡の研究で学位を得た。フライブルクのドイツ民謡アーカイヴやライプツィヒ大学のゲルマニスティク・インスティテュートの民俗学部門に属し、ルール地方の鉱山文化など一貫して鉱山とその歌謡をレポートリーとした。1933年にナチスに入党し、開戦後は少尉としてクロアチアでパルチザン掃討にも関与した。戦後しばらくはプロテスタント教会がヴェスターヴァルト地方の古館に開設した社会学校 (Sozialakademie Friedewald RP) の講師や教育主任をつとめ、1959年にマルブルク大学に民俗学が新設される共に教授となった。その間、1960年に同大学に中欧民俗研究インスティテュート (Institut für mitteleuropäische Volksforschung) を設立した。
- xxiii (176) エメリッヒ・フランシス (Emerich Klaus Francis 1906-94) オーストリア=ハンガリー帝国時代にナイセ川辺ガブロンツ (Gablonz an der Neisse 現チェコ: ヤブロンネツ・ナド・ニソウ Jablonec nad Nisou) に生まれた社会学者。
- xxiv (177) レーオポルト・シュミット (Leopold Schmidt 1912-81) : ウィーンに生まれ没した民俗学者。ウィーン大学に学び、民俗学におけるウィーン学派のなかで学業を終えたが、早くから客観的な民俗研究を目指し、ウィーン学派のマイナス面を克服した。長期の兵役の後、第二次世界大戦後、ウィーン民俗博物館を拠点として、客観性を重んじた研究方法を提唱し、ドイツ民俗学の戦後の第一世代を代表する学究であった。ドイツ民俗学のほぼ全領域で研究を進めた。
- xxv (177) ライタ川の一角 (Leitha-Winkel) ライタ川 (独語 Leitha, 洪語 Lajta, Lajtha) は、オーストリア東部のウィーン盆地付近を源流として、ハンガリーのモションマジャローヴァール付近でドナウ川に合流する河川。オーストリア=ハンガリー帝国時代の両国の境界の目安としてよく知られた。ここでは流域のうち、オーストリアのブルゲンラント州の流路湾曲部一帯を指す。

- xxvi (178) 風俗の型を描く画家 (Genremaler) リールの文筆への比喩として言われているが、原語は風俗画家を指す。その種類の絵画の要点は生活風景の型にあるため分かりやすく訳した。なおジャンルの語自体は、神話画や歴史画などの大ジャンル (genre grand) に対する小ジャンル (genre petit) の省略である。
- xxvii (179) リヒャルト・ヴォシドロ (Richard Wossidlo 1859-1939) メクレンブルクのフリードリヒスホーフ (Fridrichshof 現 Walkendorf MV) に生まれ、同地方のヴァーレン (Waren /Müritz MV) に没した民俗学者。ロストック、ライプツィヒ、ベルリンの諸大学で古典文献学を学んだ。ギリシア語に関する学位論文を中断して 1883 年にヴァーレンのギュムナジウム上級課程でラテン語とギリシア語を教える機会を得て教員となり 1924 年までその職を務めた。生家は騎士身分の地主であり、少年時から、雇用する働き手たちの言葉や唄に惹かれたとされる。郷土の文物への関心から、メクレンブルク地方においてフィールドワークに情熱を傾け、同地方の民俗学のリーダーであった。1890 年から「メクレンブルク歴史学・上古学組合」(Verein für mecklenburgische Geschichte und Altertumskunde. 1835 年創設) から《民間伝承》部門を負託された。海洋・船員の民俗研究ではパイオニア的な位置にあるが、口承文藝や習俗調査でも多くの収集と報告を残した。
- xxviii (180) ウッツ・マース (Utz Maas 1942-L) ボンに生まれた言語学者。ロマニスティク・比較言語学・哲学を学び、1968 年にフライブルク大学で学位を得、1971 年にベルリン自由大学で一般言語学・ロマニスティクの分野で教授資格を得た。1979 年にオスナブリュック大学の一般言語学・ドイツ言語学の教授となり、2007 年にグラーツ大学へ移り、2009 年に定年となった。ドイツ音音声学の他、ナチズムとその用語やナチス＝ドイツと言語学者の関係の研究でも知られる。
- xxix (181) ギーロフ (Gielow) メクレンブルク＝フォアポメルン州の Landkreis Mecklenburgische Seenplatte に所在する村で、現在の人口は約千人。
- xxx (181) ユーリウス・シュヴィーテリング (1884-1962) エングター (ブラームシェ市域 Engter/ Bramsch NRW) に生まれ、フランクフルト (M) に没したゲルマニスト・民俗学者。フライブルク大学その他でゲルマニスティク・プロテスタント神学・民俗学を学び、1908 年にゲッティンゲン大学で「歌うと語る」(*Singen und Sagen*) のテーマで学位を得、1914 年からハムブルク市博物館に勤務し、1921 年ハムブルク大学でゲルマニスティクの分野で教授資格を得た。ライプツィヒ大学員外教授を経て、1928 年からアルトゥール・ヒュープナーの後任としてミュンスター大学教授、1932 年から 38 年までフランクフルト大学ゲルマニスティクの正教授、1938 年から 45 年までヒュープナーの後任としてベルリン大学ゲルマニスティクの正教授であった。第二次世界大戦後、再びフランクフルト大学のゲルマニスティクの正教授となった。専門の中世文学の他にフォルクスランデをゲルマニスティクの一部と見て、社会学の視点を取り入れることを構想し、1927 年に発表した方法論考が知られる。ただしそれに沿ったフィールドワークを含む民俗学研究は影響を受けた弟子たち (特にマルタ・プリングマイヤーとマティルデ・ハイン) よってなされた。その視点は戦前・戦中期には新機軸であったが、半面では社会学者テンニエスの《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》を応用して無批判に《ゲマインシャフト》を基本概念とするなどの限界があり、後にインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンによって厳しく批判された。
- xxxi (182) マルタ・プリングマイヤー (Martha Bringemeier 1900-91) ミュンスター盆地の北辺リーゼンベック地方ビルクテ村 (Birgte bei Riesenbeck NRW) に生まれた民俗学者。1928-32 年間にミュンスター大学のゲルマニスティクの教授であったユーリウス・シュヴィーテリングから機能主義の考え方を学び、それに沿って民俗調査を行なった最初の人となった。ナチスに疎まれて学歴を剥奪され、抵抗者に数えられる。戦後、ミュンスター大学で講師として民俗学を講じ、また『ライン・ヴェストファーレン民俗学誌』編集の中心人物であった。

- xxxii (182) **ヴィルヘルム・ペスラー** (Wilhelm Peßler 1880-1962) はリガ (エストニア) に生まれ、ハノーファーに没した民俗学者。ドイツの諸大学で歴史学・地理学・藝術学・文学研究などをまなび、1905年に古ザクセン家屋の地理的分布の研究で学位、また1907年に「大ドイツ・エスノ地理学の計画」を論じたのが以後の研究の基礎となった。ハノーファーの祖国博物館(今日の歴史博物館)長のポストにあり、集住とその歴史など地理学的方法に特色を発揮した。3巻から成る『**民俗学概説**』を編んだ。Wilhelm Peßler (Hrsg.): *Handbuch der Deutschen Volkskunde*. 1935-38. そこに収録された多くの研究成果には、ナチス=ドイツ以前から時代思潮となっていたドイツ民族主義の要素を含むものがあるが、当時の研究水準からは学術的と見てよい。
- xxxiii (182) **母なる大地** (Mutterboden 培養土) 20世紀初めの民俗学の方法論をめぐる議論のなかで飛び交ったキーワードの一つで、分解すると《母なる大地》だが、日常語では園芸の培養土を指す。基層的な存在状態に立脚すべきとの観点からこの語が比喩的にもちいられたが、それに対しては、基層文化という安定した位相の観念が成り立つのかどうかという反論も起きた。次の拙著を参照、河野『ドイツ民俗学とナチズム』(創土社2006)所収「民俗学における個と共同体」
- xxxiv (182) **農民存在** (Bauernstand) 19世紀後半から農民をもって社会の土台と見る思想が強まった。農民・農業の実態に密着したのではなく、工業化の進展と反比例して高まった観念で、合言葉としてこの語がもちいられた。その思潮を戦術的に取り入れたのがナチス=ドイツで、また現実にも独特の農業政策を実施し(世襲農地法など)、その成功がナチ政権の前半期を安定させた面がある。ナチスは農民の支持を得て、さらにそれを工業民にもフィードバックさせて民意の結集を図った(これについては拙著『ドイツ民俗学とナチズム』所収「ナチス=ドイツの収穫感謝祭」を参照)。プリングマイヤーはナチスに迫害された抵抗者であったが、民俗調査はそうした風潮を背景にしていた。
- xxxv (182) **ブロニスワフ・マリノフスキー** (Bronislaw Malinowski 1884-1942): ポーランドのクラクフに生まれ、米コネチカット州ニューヘイブンに没した文化人類学者。母国のヤギウェ大学で数学と物理学を学んで学位を得た後、ドイツのライプツィヒ大学でヴィルヘルム・ヴントの民族心理学に接して人類学へ進み、イギリスへ移ってフレイザーの学問をも吸収しつつ1910年からロンドン大学で人類学を学んだ。アボリジニへの関心から友人と共に1914年にオーストラリアへ渡ったが、第次世界大戦の勃発でオーストリア国籍であったために活動が制限されるなか、なお可能であったニューギニア島東沖のトロブリアド島で調査活動をおこなった。参与観察の方法を初めて意識的・システマティックに取り入れた成果は『西太平洋の遠洋航海者』(*Argonauts of Western Pacific*, 1922)として刊行され、文化人類学の金字塔となった。
- xxxvi (182) **エドワード・エヴァン・エヴァンズ=プリチャード** ([Sir] Edward Evan Evans-Pritchard 1902-73) イギリスのクローボロー (Crowborough/East Sussex ロンドンの南東56km) に生まれ、オックスフォードに没したイギリスの社会人類学者。オックスフォード大学で現代史を学び、次いでロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) でエスノロジーのセリグマン (Charles Gabriel Seligman 1873-1940) とマリノフスキーに就いてエスノロジーの研究へ移った。ラドクリフ=ブラウンの後任として1946-70年にわたってオックスフォード大学の社会人類学の教授であった。アフリカのナイル河中流域のヌアー族の調査研究の成果が多く、呪術・結婚制度・宗教に重点が置かれる。
- xxxvii (182) **リーゼンベック** (Riesenbeck) ヴェストファーレン地方ミュンスター盆地の北辺、トイトブルク森の南辺と接する一帯。マルタ・プリングマイヤーの出身地域で、民俗調査のフィールドであった。
- xxxviii (183) **フェアラーゲ夫人** (Frau Verlage) マルタ・プリングマイヤーに多くの民謡に聴かせたインフォーマント。この箇所ではイエグレが同じ報告書の別の論考に収録した肖像写真(プリングマイヤー

の著作から再録)が指示されているが、省略した。

- xxxix (183) マティルデ・ハイン (Mathilde Hain 1901-83) ヘッセン州北西部の現在はハーナウ市域マイン川辺グロースアウハイム (Großauheim HE) に生まれ、同州タウヌス山麓バード・ノイエンハイン (Bad-Neuenheim HE) に没した民俗学者。フランクフルト大学に学び、ゲルマニストのフランツ・シュルツ (Franz Schultz) に就いて 1932 年に「初期表現主義演劇の本質」で学位を得た。その後、同大学のゲルマニストで民俗学に造詣が深かったユーリウス・シュヴィーテリングから機能主義的方法による研究姿勢を学んだ。ナチ政権の後半期にベルリン大学民俗学科の初代の教授アードルフ・シュパーマーの助手となった。国家教育省の指定テーマであったヘッセン州北域村落部の民衆言語の研究で 1945 年 2 月に教授資格を得た。戦後、フランクフルト大学に籍をおき、1953-68 年間には同大学に設けられた「ドイツ民俗学研究所」(Institut für Deutsche Volkskunde) を主宰し、またドイツ語圏では女性として初めて民俗学の教授 (フランクフルト大学) となった。カトリック教会系で、有力な弟子にはカトリック教会の立場に立つヴォルフガング・ブリュックナーやベルンハルト・デネゲがいる。ヘッセン州マールドルフ村の民俗衣装にかんする調査研究はシュヴィーテリング学派の代表的な成果で、後に本稿のイェグレ以外からの批判も受けることになったが、それも併せて学史上の里程碑である。
- xl (183) マールドルフ村 (Mardorf) ヘッセン州マールブルク＝ビーデンコプフ郡アマーネブルク市 (Amöneburg / Landkreis Marburg-Biedenkopf) の一区画となっている村。現在の人口は約 1500 人。歴史的には 1803 年までマインツ選帝侯領邦に属していたためカトリック教会系の村であった。1803 年にプロテスタント領主のヘッセン＝カッセル伯領邦、1806 年からは (ナポレオン支配の時期を除いて) ヘッセン選帝侯領邦、1867 年からはプロイセン王国に属したが、支配者が種々の要因から宗派面では寛容であったため、その後もカトリック教会村であり続け、1961 年でも住民の 95% はカトリック教会系であった。ドイツ民俗学ではマティルデ・ハインの調査フィールドとして知られるが、現在では 1960 年代にマールブルク大学教授インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンがさまざまなテーマでフィールドワークをおこなった場所としても重要である。
- xli (183) ウルフア村 (Ulfa) ヘッセン州ヴェッテラウ郡の現在はニッダ市域 (Nidda / Wetteraukreis) に属する村で、現在の人口は約 1200 人。歴史を通じてプロテスタント教会系の村。
- xlii (185) ロザリー・ウォックス (Rosalie H. Wax) 生年などは詳らかにし得ないが、1971 年の著作『フィールドワーク実践：警告とアドヴァイス』(*Doing Fieldwork. Warnings and Advice*. Univ. Chicago Press 1971) によると、人類学の分野においてカリフォルニア大学バークレー校で B.A.、シカゴ大学で学位を得て、シカゴ大学で助教授の後、刊行時にはカンザス大学教授であった。第二次世界大戦中に日本人収容所の調査をおこない、その後は夫の人類学者マレー・ウォックス (Murray L. Wax) と共にアメリカ・インディアンのコロニーの調査に重点を置いた。
- xliii (185) ジャン・L・ブリッグズ (Jean L. Briggs 1929-2016) ワシントン D.C. に生まれたカナダ人女性人類学者。1960 年にボストン大学で修士、1967 年にハーヴァード大学で学位を得た。以後、カナダへ移り、ニューファンドランド・メモリアル大学で 47 年間教えた。主要な業績は、カナダのイヌイットの調査研究で、特に 18 か月にわたってイヌイットのコミュニティに住んだことにもづく『怒らないで：あるエスキモー家族の肖像』(*Never in Anger: Portrait of an Eskimo Family*. 1970) が知られる。
- xliv (188) モニカ・ヴァーグナー (Monika Wagner 1944-L) ヘッセン州ヘルブロン (Herbronn HE) に生まれた美術史家。カッセル美術大学で絵画を、次いでハムブルク大学とロンドン大学で美術史・文芸学・考古学を学んだ。チュービンゲン大学に研究事務職員として勤務したのち、ヘッセン放送局の広報誌の編局へ入った。1987 年から 2010 年に定年までハムブルク大学の美術史の教授であった。

- xliv (191) ジャン＝フランソワ・ミレー (Jean-François Millet 1814-75) ノルマンディー地方グレヴィール＝アギュ郡グリュシー村 (Gruchy / Gréville-Hague) に生まれ、イール・ド・フランス地域圏セヌ＝エ＝マルヌ県バルビゾン (Barbizon / Seine-et-Marne) に没したフランス人の画家。バルビゾン派の代表的な一人で、農村風景で知られる。
- xlvi (191) イソケファリア (Isokephalia) イコノグラフィーの術語。ギリシア語の ἴσος *isos* = 同じ、κέφαλος / *kephalos*, = 頭で、多人数の頭の高さを揃えて同等であることを表わす技法。宗教画で諸聖人や信徒団を描くことなどによくもちいられる。
- xlvii (193) ロルフ・ヴィルヘルム・ブレドニヒ (Rolf Wilhelm Brednich 1935-L) ヴォルムス (Worms RP) に生まれた口承文藝研究者。チュービンゲン大学とマインツ大学でゲルマニスティク・歴史学・プロテスタント神学を学び、マインツ大学で『運命の女神の口承文芸と民間俗信』(竹原威慈による邦訳) によって学位を得た。1963年から1980年までフライブルクの民謡研究所に属して多くの資料編集にたずさわり、1969年に同大学で『15世紀から17世紀に至る刷り物に現れた歌謡集成』によって教授資格を得た。1981年にゲッティンゲン大学教授となってドイツ民俗学＝ヨーロッパ・エスノロジー研究を主宰した。1980年代からドイツ語圏における昔話研究の中心的な位置にあり、『メルヒェン百科事典』(*Enzyklopädie des Märchens*) と専門誌『ファープラ』(*Fabula*) の主たる編集者であった。1991年から1999年までドイツ民俗学会 (DGV) 会長を務めた。
- xlviii (193) カナダのサスカチュワン州 (Saskatchewan) カナダの中西部に位置し、南は米ノースカロライナ州と接する。現在の人口は約100万人で、英米系以外の住民ではドイツ系の比率が最も高く約3万人を数える。
- xliv (193) メノー派 (Mennoniten) 宗教改革期のアナバプティスト (再洗礼主義者) の一人メノー・シモンズ (Menno Simons 1496-1561 オランダのフリースラント出身) に淵源をもつキリスト教の宗派。現代では世界中に訳150万人を数える。カナダも主要な分布地の一つ。
- i (196) フッター派 (Hutterer) 南チロール出身でバプテスマ (幼児洗礼の否定・信仰による洗礼) を説いて火刑となった宗教改革者ヤコブ・フッター (Jacob Hutter 1500-36) の教説に淵源をもつキリスト教の一派で、現代では最大の分布地カナダに200か所以上のコロニーがあり4万人を超える信徒がいる。
- li (197) ディートマル・ザウアマン (Dietmar Sauermann 1937-2011) プレスラウ (現ポ Wroclaw) に生まれた民俗学者。ミュンヘン大学とミュンスター大学でゲルマニスティク・歴史学・地理学を学び、1966年にミュンスター大学で民謡研究によって学位を得て、同大学の民俗学の学術助手となった。ヴェストファーレン地方の民俗学誌の編集にたずさわった。第二次世界大戦中の戦争捕虜と戦後の東欧からの引揚民の聞き取り調査においてフィールドワークに独自の手法を発揮した。ここではラルフ・ドゥンクマン (Ralf Dunkmann) をインフォーマントとする比較的初期の研究成果が取り上げられている。
- lii (198) カルロ・ギンズブルグ (Carlo Ginzburg 1939-L) 伊トリノの生まれたユダヤ系イタリア人の歴史家・文化誌家。1966年にピサ大学で学位を得た後、ボローニャ大学で教え、1988年に米カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) の教授としてルネサンス史などを講じた。文化人類学・民俗学の知見を活かしたイタリア社会史を専門とし、主要著作はほとんど邦訳されている。
- liii (198) ガリレオのパラダイム (galileisches Paradigma) 観察と実験による確実な事象にもとづいて理解する近代科学の観点を言う。
- liv (199) ジョヴァンニ・モレッリ (Giovanni Morelli 1816-91) ヴェローナに生れ、ミラノに没したイタリア人の医師・美術史家。ドイツの諸大学で医学を、特にミュンヘン大学において解剖学を学んで比較解剖学について深い知見をもった。その後、政治家に転じて元老院に議席を得た。1873年頃から美術

研究に傾斜した。特に絵画作品の鑑定方法では、人物描法における二次的な部分（耳や爪）の描き方では時代の風潮や画派の特徴は強くなく、画家の個性や癖で処理されることが多いとして、その比較検討が作品の鑑定に有力であることを理論的にも実証的にも明示した。美術作品の近代的・科学的な鑑定方法の開拓者として知られる。

- lv (199) ジークムント・フロイト (Sigmund Freud 1856-1939) モラヴィア (現チェコ) のフライベルク (Freiberg = Pribor) に生れ、ロンドンに没したオーストリアの精神分析学者。ユダヤ人。
- lvi (199) ジョージ・ドブロー (Georges Devereux 洪名 György Dobó 1908-85) オーストリア=ハンガリー帝国時代に今日のルーマニア西部バナト地方のルゴジ (Lugosch ル Lugoj) に生まれ、パリに没したハンガリー系ユダヤ人エスノローグ・精神分析家。スイスのフリッツ・モルゲンターラー (Fritz Morgenthaler 1919-84) と並んでエスノ心理学の定礎者。1926年から主にパリに滞在し、また短期間ながらライブツィヒで書肆に職を得た。パリではマルセル・モースとリュシアン・レヴィ=ブリュルに就いた。1932年にロックフェラー財団の支援を得てアメリカへ渡り、アルフレッド・クローバーに学んだ。サモア諸島・豪・ニュージーランドを経てインドシナで18か月間調査研究を行なった後、カリフォルニア大学バークレー校で改めて人類学を学び、クローバーの下で学位を得た。軍務を経てエスノ心理学を創始した。1963年から1981年までレヴィ=ストロースの斡旋でパリの高等学校実習院 (EPHE) で教えた。
- lvii (199) マックス・マター (Max Matter 1945-L) スイス出身の社会人類学者・民俗学者。チューリヒ大学でフォルクスクンデ、コミュニケーション研究、社会史、社会経済史を学び、1975年に学位を得た。ドイツのミュンスター、ボン、マインツの諸大学で職を得て、1983年にマインツ大学で「村落の家屋と家屋所有の今日」(*Dörflicher Hausbau und Hausbesitz heute. Ein ländliches Kulturmuster, seine historische und ideologische Herkunft. Bauen und Wohnen in einer Bauarbeitergemeinde in der östlichen Hocheifel*. Mainz 1983) で教授資格を得た。以後はトルコ系移民の研究に重点を置いた。1984年にマールブルク大学教授の後、1985年から1996年までフランクフルト大学 (M) の文化人類学とヨーロッパ・エスノロジーの教授であった。1997年から定年の2010年までフライブルク大学 (i.Br.) の正教授であった。
- lviii (199) クラウス・F・ガイガー (Klaus F. Geiger 1940-L) シュトゥットガルトに生まれた社会人類学者。1981年からカッセル大学の研究員の後1993年に移民の社会参入の研究 (*Ethnische und nationale Identifikationen in westeuropäischen Gesellschaften*) によって同大学において教授資格を得て、1998年に同大学の教授となった。イスラム系移民のドイツ社会への参入の研究に厚い。

解説

本編は、ウッツ・イエグレの論考「民俗学におけるフィールドワークの歴史」の全訳である。この論者が編者となって刊行された『フィールドワーク 文化分析における質的方法』に収録された論文である。訳出にあたってはタイトルを僅かに工夫した。また原文には区切りは設けられていないが、読みやすさを考えて目次と小見出しを付けた。書誌データは以下である。

Utz Jeggle, *Zur Geschichte der Feldforschung in der Volkskunde*. In: Utz Jeggle (Hg.), *Feldforschung. Qualitative Methoden in der Kulturanalyse*. Tübingen 1984, S.11-47.

論者の略歴

ウッツ・イエグレは、1941年6月22日に南西ドイツ、バーデン＝ヴュルテムベルクのカルフ郡ナゴルト（Nagold Kr.Calw）に生まれ、2009年9月18日にチュービンゲンに没した。ボン大学とウィーン大学で歴史学とゲルマニスティクを、またチュービンゲン大学のヘルマン・パウジンガーに就いてフォルクスクンデ（民俗学）を学び、1969年にヴュルテムベルク地方のユダヤ人村の研究で学位を得た。その後、フィールドワークと歴史民俗学的手法によるキーピング村を対象とした研究で1977年に教授資格を得た。1981年にチュービンゲン大学の特任正教授となり、2001年に病気のために早期退職した。

研究者としては、地域のユダヤ人史や地域のナチズムなどを細かく復元する手法で知られた。またヘルマン・パウジンガーの民俗学の改革を支えた一人であった。刊行書・論文などの書誌データはここでは省くが、著作ではキーピング村の研究が代表的で、他に学生・大学院生を指導して行った調査研究にも見るべきものがある。

本編について

イエグレのフィールドワーク論は、ドイツ民俗学界ではそれへの賛否はともかく、ほとんどの関係者が知っている。ドイツ学界の共有物であり、それゆえ同分野に関心を寄せる日本人も念頭に置いておくことが望ましい。そういう観点から、同じ趣旨で進めている学界事情の紹介の一環として今回これを取り上げた。

なおこれが書かれることになったのには、経緯がある。イエグレが1977年にチュービンゲン大学に教授資格申請論文として提出し、同年書物としても刊行されたキーピング村の研究『あるふるさとの歴史 シュヴァーベンの村の近代化過程』に起因するからである。原タイトルを挙げる。Utz Jeggle, *Kiebingen, eine Heimatgeschichte. Zum Prozeß der Zivilisation in einem schwäbischen Dorf*. Tübingen 1977 (Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen, 44)

その研究は、特定の村落の歴史の掘り起こしと共に現代の実態の把握のためにはフィールドワークを組み込んでいた。それにあたってイエグレは、通常の参与観察とは異なった姿勢で調査に臨んだ。参与観察は通常、外来者である観察者は当該の地域社会の人々に対して刺激をできるだけあたえないように工夫をする。しかしイエグレは、異分子の闖入はいかに取り繕うとも厳然たる事実であることを重く見た。まして観察を、インフォーマントの与り知らぬところで自己の功業に組むとなれば、大小深淺はともかく詐意狡譎の気配はまぬがれない。それを脱するには、観察者たる己れの何者なるや、来訪潜在の意図の何処にあるやを明示するしかない、というのである。かくして特殊な趣旨を以て村に入り来たった外来者と村民との心理の輻輳として調査は進行した。蓋し、観察は主体、観察を受けるは客体という古典的な科学的手法、観察と実験の構図への反省であった。またそれ

は、客体が人間と人間の集団であることからすれば、故無しとしなかった。しかし他方で、それは却って外来者の踏み込みの度が過ぎることになりはしないかとの疑念をただちに惹き起こした。良心的であろうとするあまり、当該研究にもとめられる学術的な客観性を乱すことになる恐れが大きいとの異論である。それを見てイエグレは、数年の構想と問題意識を同じくする同僚・後輩を募った後、改めてフィールドワークのあり方に絞った共同研究を組んだ。その成果が『フィールドワーク 文化分析における質的方法』であった。本論はその中で最も長く、また指針論文でもある。テーマを一口に言えば、フィールドワークの方法としての参与観察 (participant observation) への反省と再検証ということになる。

またそのテーマに取り組むに至ったより大きな背景についても、始めに触れられる。民俗学が信頼性のある学問分野であり得るために第二次世界大戦直後から進められてきたのは社会学への接近であり、また統計資料の重視であった。しかしそれが果たして民俗学らしい対象把握を満たす路線であるかどうかへの疑義も折にふれて起きた。たとえば何らかのマイノリティの調査、とりわけ心理的な側面となると、むしろエスノグラフィーが強みを発揮する可能性がある。しかしエスノグラフィーは、これまた伝統的な民俗学の批判的な検討なくしては隣接諸分野に伍して説得性を得ることはむずかしい。そのあたりの諸問題の聯関に言及した後、イエグレはフィールドワークの方法に話題を絞り、またその検討にあたっての起点をドイツ民俗学史の初期にもとめた。

初めに取り上げられたのは、ドイツ民俗学の草創期ないしは直接の前史とされる啓蒙主義時代である。そこではすでに二種類の視点が現れていた。当時の国家や領邦の解明的な財務官僚たちが国土事情を把握しようとしたときの《実事の眼》(Tatsachenblick) がその一つである。二つ目は、啓蒙主義の旅行家たちが発揮した《旅行家の眼》(Reiseblick) である。なお《実事の眼》などのキーワードは本編の直前に刊行されたヘルマン・ボンスの研究テーマで (原注 13)、ボンスが社会学者として今日ほど旺盛な執筆をしていず教授資格にも至っていなかったことを勘案すると、イエグレの目配りは冴えている。

しかしドイツ民俗学が民俗学らしい相貌を帯びようになるのは、ロマン主義思潮においてであった。ロマン主義は複合的・多面的であるが、そのなかから特殊な脈絡が優勢になって民俗学の土台になっていた。神話学に代表されるような遡源志向である。現行の諸現象を過去の意味深い、時には壮大な観念の断片や名残りとしてとらえようとする姿勢で、その長所が最大限に引き出されるとともに短所をも付着させた代表例がグリム兄弟であった。文献だけでなくフィールドワークの方法ともなったその行き方を、イエグレは《宝探しの眼》(Schatzsucherblick) ないしは《宝掘りの眼》(Schatzgräberblick) と呼んでいる。

この視点はよほど時宜に適ったらしく、グリム兄弟に倣った多くの探索者が活躍するようになり、それが民俗学の普及に他ならなかった。しかし時と共に、次第に掘りあてる宝の質は落ちてきた。よく言われるように珍習奇俗を追いもとめ、そこに大仰な神話的な意

味づけをする風潮である。その弊害をただすべく、グリム兄弟と活動時期が一部で重なるものの、兄弟とは人脈をもたずに独自にフォルクスウンデを提唱したのが、ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールであった。その標榜するフォルクスウンデは民俗学よりも、民衆学や広義の国家学を意味しており、現行の民衆実態とそこに走る法則性を問おうとするのが特色であった。またそれにあたってのリールの立ち位置は、保守的な社会改良家のそれであった。1848年の三月革命を出身地のジャーナリストとして経験し、見事なルポルタージュにまとめたのが最初の成果であるが、そこでリールが学んだのは《二度と革命騒ぎが起きるようなことがあってはならない》というもので、同じ世相から革命の意義を読んだカール・マルクスとは対照的であった。その中身はともかく、リールはまた優れた観察者であり、フィールドワーカーと言ってもよかった。当時としては、民衆の生活実態の活写にかけては第一級の文筆家であった。が、その説得力は世相の奥にある法則の把握に裏付けられていた。しかし第二次世界大戦後の研究のなかで次第にあきらかになったところでは、リールは予め社会にはたらく法則を想定しており、それを肉付けすべく現実描写をおこなっていた。そうした事前の予想は多かれ少なかれ誰もが行なうものだが、リールの場合は、自己の思想から割り出した社会の構図への固執がややナルシズムであった。イエグレは、その側面からリールの実地調査すなわちフィールドワークの特色を言い当てた。“Ordnungsblick”で、直訳すると規則の眼・秩序の眼であるが、ここでは意味が伝わるように《スタンダードの眼》と訳した。自己が構想ないしは願望する社会構成の基本にそって現実をつなぎ合わせたという趣旨である。もっとも、リールを非常にポジティブに評価する人々には、イエグレの整理は俄かには受け入れ難いものであろう。その点では、ドイツ民俗学史の一齣であるリールの存在と、後のリール評価をめぐる議論を背景にしている。

これらの後、民俗調査としてのフィールドワークのあり方が検討される。もっとも、それは飛び石伝いである。フィールドワークの方法に絞っているとは言え、他にも重要な里程碑は幾らもある。しかしイエグレの見方も、一方の大胆なピックアップである。そこで挙げられるのは、先ずリヒャルト・ヴォシドロであるが、こういうかたちでライトがあてられるのは興味深い。日本でも海洋民俗研究の先駆者として名前だけは早くから知られてきた人物であるが、ドイツのバルト海沿岸地方、特にメクレンブルクにおける民俗学の草分けであった。中心的な機関であるロストックの施設は今も「リヒャル・ヴォシドロ民俗学研究所」を名乗っている。イエグレの本編で取り上げられているのは、ヴォシドロの口承文藝採集の様子である。採集の中身は話題から省かれているが、たとえば謎々やシュヴァンク（笑話・滑稽話）の収集は、文献をもとにした先行例を除けば、近代における出色の成果として知られている。

次に来るのは、いわゆるシュヴィーテリング学派である。フランクフルト大学やミュンスター大学でゲルマニスティクを主宰したユーリウス・シュヴィーテリングは、自身は特

に民俗学の成果を残したわけではないが、1927年にゲルマニスティクの専門誌に発表したフォルクスクンデの方法論考の故に民俗学史に名前をとどめている。またその影響を受けた二人の女性民俗学者、マルタ・ブリンゲマイヤーとマティルデ・ハインが共にシュヴィーテリングの指針に沿ったフィールドワークを行なったことによって不可欠の里程碑となった。ただしシュヴィーテリングとその学派には、今日から見ると限界があった。(イエグレの観点を訳者が敷衍すると) 1960年代にインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンなどが否定的に指摘したことだが、社会学者フェルディナント・テンニェスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の《ゲマインシャフト》の術語を無批判に取り入れてしまったことである。しかし起点になったシュヴィーテリングの方法論考が1920年代であり、弟子たちのフィールドワークも1930年代から50年代だったことを考えると、術語の問題性は20世紀前半のドイツ社会学の中心人物たち、ゲオルク・ジンメルからアルフレート・フィアカント、さらに初期のヘルムート・シェルスキーに続く流れとも共通していた面がある。なおマティルデ・ハインについて言えば、フィールドワークがよく話題になるが、文献資料にも堪能で、口承文藝研究の分野でも重要な発見を幾つも行なっている。

イエグレはマティルデ・ハインのフィールドワークを、大きく見れば同じ機能主義の視点に立つ文化人類学の巨人プロニスワフ・マリノフスキーの場合と比較した。本編のテーマが最も生き生きと論じられるのはこのあたりであろう。それには藝術学のモニカ・ヴァーグナーの協力を得た写真の読み解きも与っている。後続のフィールドワーク諸事例への注目にあたっても、分析・評価の目安はここにある。ただ言い添えれば、イエグレの主張は一貫しているが、そこで(全面的ではないが)批判の対象とされたマティルデ・ハインの仕事も並べてみるのが望ましい。分かりやすく写真をもちいると、たとえば写真5のマールドルフ村の景観は、個性が埋没した共同体が表現されていると見るのは間違いではない。が、ハインにおいては、手前の畑は村を孤立的に見せるのが主眼ではなく、村人が誇りにする(何世紀にもわたる手入れの結果として)肥沃な土壌という脈絡も重なっている。また背景の丘、アマーネブルクは歴史を通じて永く領主のマインツ大司教の役所が置かれていたところで、19世紀初めにプロテスタント系の侯国(ややあってヘッセン王国)に編入された後、周辺のカトリック系の村々にとっては一種の心の拠りどころとなっていた。それについてもマティルデ・ハインは実証的・立体的に描いている。方法論でも民俗衣装の研究でも出色であり、これ自体も紹介の機会があればと考えている。なおここでは写真12の元の写真を挙げておく。《部分》と明記されているように、一部が切り取られ一ページ大に拡大されている。隠れた脈絡を表に引き出すというイエグレの考え方であるが、これはこれで議論を誘発するのは必然的であった。



(参考) 写真 12 の元の全体図 マデイルデ・ハインの民俗衣装研究 (原注 67) 所収

シュヴィーテリング学派の功罪を問うた後、イエグレは、同世代の民俗研究者たちがフィールドワークの進め方について見せた戸惑いと試行と成功に光を当てた。一例は、口承文藝研究家ロルフ・W・ブレードニヒがカナダに移住したドイツ系のマイナーな宗教グループの間で実施した採集活動である。二例目は、ミュンスター大学を拠点にしたヴェストファーレン地方の調査研究にたずさわってきたディートマル・ザウアマンによる戦争体験者からの聞き取り調査である。ただし本編では調査テーマが取り上げられるのではなく、もっぱらフィールドワークにおける現場の対人関係が焦点になっている。調査者とインフォーマントの関係に悩んだ研究者たちの心理と実践の軌跡である。

最後の段落は、一聯の検証をより大きな視界の中に置こうとしたのであろうが、あまり緊密な行論ではない。なお本編全体を通して隣接する諸分野の論者、すなわち文化人類学(マリノフスキー、エヴァンズ=プリチャード、ロザリー・ウォックス等)や社会学(ボンズ)やドイツ言語学(ウッツ・マース)の知見への言及が適宜なされており、テーマ自体は良心性の故の狭窄に傾くだけに、バランスが図られたものとなっている。

*

以上はイエグレの本編について、その筋立てをまとめた。もとよりドイツ民俗学におけ

るフィールドワークのあり方では、他にも重要な論者や見るべき成果は多い。イエグレが師事し、やがてテュービンゲン大学において同僚となったヘルマン・パウジンガーが中心になった『新しい移住団地 - 民俗学・社会学調査』（1959年）もそうである。またレーオポルト・クレツェンバッハー、レーオポルト・シュミット、ハンス・モーザー、カール＝ジーギスムント・クラマー、インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンなどは第二次世界大戦後のドイツ民俗学を代表する学究で、訳者がこれまで多少紹介してきたが、いずれも独自のフィールドワークの手法を発展させた。さらに、今日では多くの場所で地元民は調査者の訪問に慣れているが、それをどう見るかについても、パウジンガーが観光現象の一般化に因んで、観光者と観光受け入れの地元民の双方における立場の推移を理論的にとらえている。

なお言い添えるべきは、イエグレの特に本編に対して、全面的にはないが批判的な言及がイーナ＝マリーア・グレヴェルスによってなされたことである。ドイツ民俗学界において英米系の文化人類学に最も厚い知見をもっていた女性研究者（フランクフルト大学教授）であるが、その「ジェンダーから見たフィールドワーク：文化的営為としてのパフォーマンスにおける男と女と人間」（1997年）は、さすがに要点を押さえている。その講演論文は、数年前に本誌『文明 21』（第 31 号 [2013 年]）に訳出したことがあり、またそれを解説した拙論も同誌に載っている。本編と併せれば、ドイツ語圏の民俗学界においてフィールドワークめぐってなされてきた議論の特質と広がりがいっそう見えてくるだろう。

*

私事を言えば、故イエグレ教授とはテュービンゲン大学で何度か会った他、ここで名前の挙がるなかの数人とは面識がある。またヘッセン州のアメーネブルクとその麓のマルドルフ村は、10年も前のことだがマルブルク大学に滞在したとき、ヨーロッパ・エスノロジー研究所長のジークフリート・ベッカー教授が数回連れて行ってくれた。そのうち一度は聖体大行列の当日であった。同村は1930年代にマティルデ・ハインが民俗衣装の調査をおこなったところであると共に、ベッカー教授の師インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン女史が1970年前後に民俗学の記録映画（全31篇）を撮影した場所の一つでもある。なお本編はずっと前から計画しつつも先延ばしになっていたが、ようやく今回、翻訳・紹介を果たすことができた。役立てる方々がおればと願っている。

(S.K./ 30.Nov.2018)